

福沢諭吉

ペンは剣よりも強し

高山毅

青空文庫

この伝記物語でんきものがたりを読よむまえに

「天てんは人ひとの上うへに人ひとをつくらず、

人ひとの下したに人ひとをつくらず。」

明治めいじのはじめ、「学問がくもんのすすめ」で、いちはやく

人間にんげんの自由じゆう・平等びやうどう・権利けんりのとうとさをとき、

あたらしい時代じだいにむかう日本人にほんじんに、

道みちしるべをあたえた人ひと。

それまでねっしんにまなんだオランダ語ごをすてて、

世界せかいに通つう用ようする英語えいごを、独学どくがくでまなんだ人ひと。

アメリカやヨーロッパに三度もわたり、

自分の目^めでじつさいにたしかめた、

外国^{がいこく}のすすんだ文化^{ぶんか}や思想^{しそう}をしようかいし、

大きなえいきようをあたえた人^{ひと}。

上野^{うえの}の戦争^{せんそう}のとき、砲声^{ほうせい}をききながら、

へいぜんと講義^{こうぎ}をつづけた人^{ひと}。

福沢論吉^{ふくざわゆきち}は、ながい封建制度^{ほうけんせいど}にならされた人々^{ひとびと}を

目ざめさせるのは、学問^{がくもん}しかないと、

けわしい教育者^{きょういくしゃ}の道^{みち}をえらびました。

いま、慶応義塾^{けいおうぎじゆくだい}大学の図書館^{としよかん}には、

「ペン^{けん}は剣^{けん}よりも強^{つよ}し。」

のことばが、ラテン語で書かれています。

諭吉ゆきちのいっしょう一生は、この理想りそとうでつらぬかれました。

日本にっぽんの民主主義みんしゆしゆぎを考かんえるとき、

わたしたちはいつも、

諭吉ゆきちにたちかえらなければなりません。

1
勉強べんきょうはごめんだ

びんぼうどつくりをさげた少年しょうねん

夏なつのはじめのある日の午後ひごごのことでした。

十二、三さいになる少年しょうねんが、九州きゅうしゅうの中津なかつ（大分県おおいたけん）

の町まちを、むねをはつてあるいていました。こしに大だい小しょうの刀かたなを

さしているので、士族しぞく（さむらいの家いえがら）の子こどもとすぐわか

りますが、ふるぼけたふるしきづつみを左ひだりの小こわきにかかえ、小ちい

さなとつくりをその手てにさげています。どうやら少年しょうねんは、町まち

に^か買^いもの^にきたかえりのようでした。

町^{ちやうにん}人^らたちは、

さも、ふしぎなものをみたといわんばかりに、
少^{しょうねん}年^らのうしろすがたをゆびさして、ささやきあいました。

「おさむらいの子^こが、まつ昼間^{ひるま}、どうどうと、びんぼうどつくりをさげて、買^かいものにくるとは、おどろいたな。」

「まつたくだ。ちかごろは、おさむらいも、ふところぐあいがよくないとみえて、一しよう（一・ハリツトル）どつくりをさげて買^かいにみえるが、はずかしそうにほおかむりをして、しかも、日^ひのくれがたとか、夜^{よる}になつてから、買^かいにくるとい^いうのが、ふつうだからな。」

「まあ、おさむらいには、士族^{しぞく}としての体面^{たいめん}（せけん）にたいす

るていさい)があるからな。それを、あのようにどうどうと……
いつたい、どこの子^こどもだろう。」

町^{ちやうにん}人たちがはなしている、その少^{しょうねん}年は、じりじりとて
りつける太^{たい}陽^{よう}にあせばんだのか、ときおり、右^{みぎ}手で、ひたいの
あせをふきながら、士^し族^{ぞく}やしきへかえつていききました。

やがて、少^{しょうねん}年^{ねん}がたちどまったのは、門^{もん}こそありますが、ふ
るぼけた、そまつなかやぶきやねの家^{いえ}でした。

「ただいま、かえりました。」

少^{しょうねん}年^{ねん}が、げんかんからはいると、

「おかえり、諭^{ゆきち}吉。ごくろうだったね。とちゆうで、知^しりあいの
人^{ひと}にあわずにすんだかね。」

と、お母さんのお願がやさしくむかえました。

「ええ、だれにもあいませんでした。でも、だれかにあつたつて、わたしはへいきです。自分の金で、ものを買うんですから、すこしもはずかしいことはありません。」

「そうとも、そうとも。よくいつてくれました。母さんは、そのことばをきいて、とてもうれしいんだよ。うちがびんぼうでも、おまえがいじけないでそだつてくれるということがね。……そうそう、かえつてきてすぐでわるいけれど、たんすがあかなくなつたから、ちよつとなおしてもらえないかしら。」

「いいですとも。あかなくなつたのは、どのたんすですか。」

諭吉のひとみは、きゆうにいきいきとかがやき、刀をいつもの

ところにおくと、たんすのある部屋へやにかけこむようにしてはいっていききました。

「このたんすのひきだしなんだけどね。」

あとからついてきたお母さんかあのいうのをきいて、論吉ゆきちは、そのひきだしのあちらこちらをしらべはじめました。それから、かぎをつつこんで、まわしてみましたが、なかなかあきません。

「これは、かぎがこわれたんですね。くぎでなければ、あかないかもしれません。」

「そうかい。では、くぎをつかつて、あくようようにしておくれ。」

お母さんかあは、台所だいどころのほうへさっ歩いていききました。

論吉ゆきちは、くぎをもつてきて、そのさきをまげて、かぎあなにさ

しこんで、あつちにまわしてみたり、こつちにまわしてみたり、いろいろとくふうをこらしました。顔かおのあたりを、かが四、五ひき、うるさくとんでいるのを手てでおいはらいながら、かんがえこんでいます。両りょうあし足をかわりばんこにあげているのは、かにさされないためでもあります。便所べんじょにいきたいのをがまんしているためでもあります。それほど、ひきだしをあけるのにいっしょうけんめいになっていたわけです。

そのうち、ひきだしがすつとあきました。

「お母かあさん、あきましたよ。」

といったとたん、こらえていることができなくなつたのでしよう、諭吉ゆきちはバタバタと便所べんじょへはしりました。

なんだ、石ころじやないか

ところが、そのとき、兄さんの三之助が、ほご紙（ものをかきそこなつて、不用になつた紙）を部屋いっぱいにひろげて、整理をしていました。

いつもなら諭吉は、便所へいくのに、その部屋をとおらないのですが、いまはいそいでいるものですから、近道をして、ついで、ほご紙をふんでしまったのです。すると、

「こりや、まてつ、諭吉。」

と、兄さんが大きな声でしかりつけました。

「おまえは、目めがみえぬのか。これをみなさい。なんとかいてある。奥平おくだいら大膳だいぜん大夫のだいぶと、とのさまのお名なまえがかいてあるではないか。」

と、えらいけんまくです。八とつ年しうえ上にいの兄にいさんのいうことですから、しかたがありません。諭吉ゆきちは、

「ああ、そうでございましたか。でも、わたしは、つい、しらなかつたものですから。」
と、いいわけをしました。

「しらなかつたで、すむか。目めがあればみえるはずだ。とのさまのお名なまえを足あしでふむとは、なんたることか。臣子しんしの道みち（けらいや、子このまもるべきこと）をわきまえない、ふこころえものだぞ、

おまえは。」

「わたしは、とのさまを足あしでふんだわけではありません。たまたま、わたしのふんだほご紙しに、とのさまのお名なまえがかいてあつただけのことです。」

「だまれつ、とのさまのお名なまえのかいてあるものを、足あしでふみつけたことは、とのさまをふみつけたとおなじことだ。お父上ちちうえが生いきておられたら、これをなんといわれるか、かんがえてみるがよい。」

日ひごろは弟おとうとおも 思おもいの兄にいさんが、ほんとうにかんかんになつておこつて居いるのです。論吉ゆきちは便所べんじよにはやくいきたいので、いまは、あやまるよりほかに方ほうほう法ほうがないとおもいました。

「これは、わたしがわるうございました。これからは気をつけますから、かんにんしてください。」

と、おじぎをしてあやまり、いそいで便所べんじよにいきました。やつと、ときはなされたような気持ちきもになりました。

しかし、気がおちついてくると、兄さんにいのことばには、なつとくのできないものがあります。

（なんだ、とのさまの頭あたまをふんだというのではない。ただ、名なをかいてあるほご紙しをふんだだけのことだ。紙かみの上うえの字じなど、かまうことはないじゃないか。それを、兄さんにいはあんなにおこつたりして……。）

と、諭吉ゆきちはふまんにおもい、そして、紙かみの上うえの文字もじを、ただたい

せつにするということに、うたがいがわいてきました。

兄にいさんがいうように、とのさまの名なのかいてあるほご紙しをふみつけてわるいのなら、神かみさまの名なまえのかいてあるおふだをふんだら、どうなるだろうか。こうかんがえた諭吉ゆきちは、さつそく、その夜よ、神かみだなから、おふだを一まいとつて、こつそり足あしでふんでみました。ところが、べつにかわったことはおこりませんでした。(うん、なんともない。これはおもしろいぞ。よし、こんどは、便所べんじょにもつていつて、ためしてみよう。)

おもいきつて、便所べんじょの中なかへおとしてみました。なにごとかおこつたら、すぐとびだせるように用意よういして、こわさのために手足てあしのふるえるのをがまんして、じつとようすをみていました。しか

し、やはりなにごともおこりません。

(そうれ、みる。兄にいさんがよけいなことをいってしかつたが、あんなことをいうのはおかしいんだ。)

と、諭吉ゆきちはあんしんもし、また、かたくしんじることができたので、とくいにもなりました。

しかし、こればかりは、兄にいさんにはもちろん、お母かあさんにもねえさんにもはなせません。はなせば、きつとしかられるにちがいありませんから、一人ひとりでそつと、自分じぶんの心こころの中なかにしまっておきました。

諭吉ゆきちは、兄にいさんのいうことになつとくがいかず、それをそのままにしておかずに、じっさいにためしてみ、自信じしんをえたわけ

した。すると、もつと、いろいろなことをためしてみたくなりま
した。

論吉ゆきちのおじさんの家の庭いえにわのかたすみにも、おいなりさんをまつつ
た小ちひさなほこらがありました。それを、大人おとなたちは、しんみよう
な顔かおつきでおがんでいますが、いったい、おいなりさんの正しょうた
体いはどんなものか、それをしりたくてたまりません。しかし、
大人おとなたちは、神かみさまの正しょうた体たいをみるなどということとは、だいそ
れたことで、ばちがあたつて目めがつぶれたり、手てや足あしがまがつて
しまうぞ、とおどかすばかりで、論吉ゆきちによくわかるようなせつめ
いをしてくれません。そこで、
(よし、ぼくがみてやろう。)

と、ある日、あたりに人のいないのをみすますと、いなりのほこらのとびらを、そつとひらいてみました。おっかなびつくりであけたのですが、そのとたん、

「なあんだ、石ころじゃないか。」

と、おもわず声をだしたほどでした。ほこらの中には、なんのへんてつもない石ころが、一つはいつているだけではありませんか。

みたところ、道ばたにころがっている石ころと、ちつともかわつたところはあります。これに、なにかとくべつに神さまの力がやどっているのでしょうか。もし、そうだとすれば、この石ころをほうりだして、そのへんにころがっているべつの石をほこらにいれたら、どんなことになるでしょうか。大人たちは、にせの

おいなりさんをありがたがらなくなるでしようか。

諭吉は、それをためしてみるために、ほこらの石をとりかえておきました。

べつだん、なんのかわったこともおこりません。それどころか、あくる朝、おいなりさんをみにいくと、近所のおばあさんが、おみきとあぶらあげをそなえて、なにやら口の中でぶつぶつとなえながら、しんみようにおがんでいるではありませんか。

（あつはつはつ。ばかなおばあさんだな。ぼくの入れた石ころに、おみきとあぶらあげをあげておがむなんて……。）

と、諭吉は、おかしさをこらえて、その場をたちさりました。

けれども諭吉は、このことを、だれにもはなしませんでした。

はなせば、しかられるにきまつているし、自分じぶんでも、けっしてよいことをしたとはおもっていないなかつたからです。それでも、このいたずらによつて、神かみさまのばちがあたるなどということとは、ありはしないのだということ、諭吉ゆきちはつきりとしることができました。

勉べん強きやうなんて、だいきらい

諭吉ゆきちは、このように、自分じぶんでなつとくのできないことについて、自分じぶんでじつさいにためしてみるといふ、しつかりした少しょう年ねんでした。おまけに手てさきがきようなので、家いえではたいへんち

ようほうがられていました。

いどにものがおちたといえ、どういふふうにしてあげたらよいか、その方法ほうほうをかんがえだして、わけなくひきあげました。しようじをはることなど、うまいもので、家いえのしようじはもちろん、しんるいからたのまれて、はりにいくこともありました。げたのはなおもすげれば、たたみばりを買かつてきて、たたみのおもてがえまでやりました。ですから、ひまさえあれば、木きのきれをけずって、なにかをつくっていました。

あのおいなりさんの正しょうたい体をみてからも、諭吉ゆきちの生活せいかつには、べつだんかわったことがありますでした。

一年ねんたつて、また夏なつがやってきました。

ある日、お母さんがせんたくをしようとして、たらいをもちあげると、たががゆるんでいたのでした。しょうか、ばらばらにこわれてしまいました。あたらしいたらいをかうほかないとおもわれました。しかし、諭吉は、このばらばらにこわれたたらいをなおす役をひきうけました。

たけをわつて、たがのわをつくるのは、たいへんむずかしい仕事ですが、諭吉はいろいろとかがえて、とうとう、もどおりのだらいいにおおしてしまいました。自分ながら、よくやれたものだど、いささかとくいいになって、

「どうです、お母さん。こんなになりっぱになりましたよ。みてください。」

といました。

お母さんやねえさんは大よろこびでしたが、兄さんは、あまりよい顔をしません。

「諭吉、たらいのたがをなおすのもよいけれど、すこし勉強をしたらどうだ。さむらいの子が、字をならわず、まるで職人がやるようなことばかりしているのは、みつともないぞ。」

せつかく、いい気持ちになっていくところへ、このようにきびしくいわれたので、諭吉はむっとしました。

「兄さんは、わたしに勉強しろというんですか。いやなことだ。勉強なんて、わたしはだいきらいです。」

「では、きくが、おまえは、これからさき、なんになるつもりだ

」。

「そうですね。まあ、日本にっぽん一の大金持ちおおがねもになつて、おもうぞんぶんお金かねをつかつてみたいものですね。」

「なにつ、大金持ちおおがねもになりたいだど？ 諭吉ゆきち、おまえは、それ

でもさむらいの子こか。さむらいの子こというものは、お金かねもうけな

どかんがえてはならんぞ。おまえは、まだ小ちいさかつたからおぼえ

てもいまいが、お父上ちちうえはな、さむらいの子こが金かねかんじようなど

ならうものじゃないといつて、わたしがかよつていた手てならいの

先生せんせいが、かけぎんの九九くくをおしえたら、そんな先生せんせいのところ

へ子こどもをあずけられないといつて、おこられたことがあるくら

いだ。お父上ちちうえは、りつぱな学がくしや者しやだつた。その血ちをひいたおま

えが、勉べんきよう強きようはだいきらいだなんていって、はずかしいとおもわぬか。」

「わたしは、勉べんきよう強きようがきらいなんですから、しかたがないじゃありませんか。それに、さむらいの子こがお金かねのことをいって、どうしてわるいんですか。うちだつて、もつとお金かねがあつたら、どんなにいいか。兄にいさんだつて、心こころの中なかでは、そうおもっているくせに。」

「へりくつをいうな。おまえのさきざきのことをかんがえて、勉べんきよう強きようするようになすめてやっているのに、おまえは、それがわからんのか。なんというばかもものだ。そこへすわれ、お父ちち上うえにかわつて、おまえのしようね（こころね）をたたきなおしてやる

から。」

兄にいさんは、そばの木刀ぼくとうをとつて、諭吉ゆきちのほうへ、あらあらしい足あしどりでつめよりました。このとき、

「おまちなさい、三之助さんのすけつ。」

と、お母かあさんが、中なかにわつてはいりました。

「兄きょうだい弟にいげんかはいけません。諭吉ゆきちの勉べんきよう強きやうぎらいは、母かあさんにもせきにんがあります。家いえがまずしいものだから、つい、諭ゆ吉きちに家の手てだすけばかりをしてもらっていました。諭吉ゆきちには、母かあさんから勉べんきよう強きやうするようによくかせますから、この場ばはかんにんしてやつておくれ。」

木刀ぼくとうをもつてたつている兄にいさんの足あしもとに、お母かあさんはきち

んとすわつて、頭あたまをたたみにすりつけんばかりにして、たのみました。兄にいさんも、こしをおろして、木刀ぼくとうをかたわらにおき、お母かあさんのまえに、だまつて頭あたまをさげていました。お母かあさんのうしろには、諭吉ゆきちがおなじように、頭あたまをさげていました。

おんな
女おんなこじきをいたわるお母かあさん

それから二週しゅうかん間かんもたつたでしようか。よくはれた日ひのお昼ひるちかくに、着物きものはぼろぼろ、かみはぼうぼうの女おんなこじきが、諭吉ゆきちの家の門いえもんの外そとにたち、はいるうか、はいるまいかと、ためらつていました。それを、せんたくものをほしていた諭吉ゆきちのお母かあさんが、

目ざとくみつめました。

「まあ、おチエじゃないか。ひさしぶりだね。さあ、こちらへおはいいり。」

と、庭にわのほうへよびいれました。おチエはすなおに庭にわのほうへはいつてきましたが、右手みぎてで頭あたまをなんべんもかいています。

「おや、おチエは、また、しらみをわかしたとみえるな。さあ、そこへおすわり。わたしがとつてあげるから。」

と、庭にわの草くさの上うへにすわらせ、

「諭吉ゆきちや、ちよつときて、てつだつておくれ。」

と、土間どまで木きぎれをけずつている諭吉ゆきちに声こえをかけました。諭吉ゆきちは、すぐにでてきましたが、

「ああ、また、しらみたいじですか。おチエは、からだかくさいから、いやだなあ。」

と、鼻はなをおさえながらいいました。

お母かあさんはいつも、おチエのしらみをとってやるのでした。そのとつたしらみを、庭にわいし石うえの上におきます。しらみはいだそうとします。それを、小石こいしをもつてつぶすのが、諭吉ゆきちの役目やくめでした。諭吉ゆきちは、こればかりは、きたなくて、きたなくて、むねがわるくなるようでした。でも、お母かあさんのいいつけなので、いつもがまんして、てつだいました。

おチエは、中津なかつの町まちでは、だれからもばかにされていました。それなのに、諭吉ゆきちのお母かあさんは、士族しぞくとしての身分みぶんなどにこだわ

らず、よくおチエのめんどろをみてやるのでした。

「まあ、こんなに、しらみがうようよわいては、おチエもかゆかったろうね。これからは、かみをよくあらうようにして、しらみをわかすんじゃないよ。」

と、まるでおさない子どもこにでもいうように、おチエに教えおしさとしながら、しらみをつぎつぎにとります。諭吉ゆきちも、いそがしくしらみをつぶします。

おチエは、さもうれしそうに、ときおり、にたつとわらつてみせています。そのうち、頭あたまがかゆくなくなつて、気持きもちちがよくなくなったのか、おチエは、ねむたそうに、こつくりをはじめました。

「さあ、そつとしておいてやりましょう。諭吉ゆきち、おチエの顔かおをみ

てごらん。よいゆめでもみているのか、うれしそうな顔をして、
まるでほとけさまみたいじゃないか。」

と、お母^{かあ}さんがいいました。諭吉^{ゆきち}は、

「ええつ。」

とおどろきました。そういわれて、おチエの顔^{かお}をみると、なる
ほど、お母^{かあ}さんのいうことがわかるような気持^{きもち}ちがしました。

これまで女^{おんな}こじきをいたわるお母^{かあ}さんを、ふうがわりなお母^{かあ}さ
んだとおもっていたのですが、人間^{にんげん}は、わけへだてなくしんせ
つにしなければならぬということ^{こと}がわかり、

「お母^{かあ}さんはえらいな。」

と、あらためてお母^{かあ}さんをそんけいしたくなりました。

「諭吉ゆきちや、母かあさんは、このあいだから、おまえにいつてきかせようとおもっていたことがあります。おまえは、兄にいさんに、なんになるつもりだときかれて、大金持おおがねもちになりたいとこたえましたね。けれど、兄にいさんのいわれるように、勉べんきよう強きやうはやはりしてもらいたいとおもいます。なくなられたお父とうさまは、おまえをおぼうさんにしたいといわれていたんですよ。」

「えっ、わたしをおぼうさんにするって、ほんとうですか、お母かあさん。」

「ほんとうですとも。それには、すこし、わけをはなさなければ、おまえには、わからないかもしれないが……。」

こういつて、お母かあさんがはなしてくれたのは、つぎのようなこ

とでした。

お父とうさんのえがいたゆめ

諭吉ゆきちのお父とうさんは、福沢百助ふくざわひやくすけといい、中津なかつのどのさまのけ
らいでした。ひじょうにしようじきで、まじめな人ひとであり、また、
学問がくもんのすきな、すぐれた漢学者かんがくしやでした。けれども、身分みぶんがひ
くいたために、つまらない役職やくしやくにがまんしていなければなりま
せんでした。

それは、江戸幕府えどばくふのおわりにちかいころでしたが、そのころの
日本にっぽんの社会しゃかいは、まだ、さむらいがいちばんえらいとされてい

ました。町ちやうにん人にんやひやくしようたちは、いつも、さむらいにいじめられていました。

さむらいの家にいえ生まれたものは、どんなにつまらない人間にんげんでもさむらいになり、いばることができました。町ちやうにん人にんやひやくしようの子こどもは、いくらすぐれた人間にんげんでも、さむらいにはなれませんでした。また、さむらいの中なかでも、身分みぶんのたかいものと、ひくいものとにわけられていて、身分みぶんのひくいさむらいの子こは、身分みぶんのたかいさむらいの子こより上うえの役目やくめにつくといふことは、ゆるされませんでした。

そんなわけで、諭吉ゆきちのお父とうさんは、りっぱな人ひとでしたが、つまらない役目やくめにしか、つくことができませんでした。

なかつ
中津のとのさまは、おおさか大阪の堂島どうじまにくらやしきをかまえてい

ました。このくらやしきは、どこのとのさまももっていたもので、
じぶん自分の国くにでとれる米こめや、めいさん名産・とくさん特産の品しなじな々々を、このくらやしきじぶんにおくつてきて、それをおおさか大阪の商しょうにん人にう売りわたして、
自分の国くにの財ざい政せいをまかなうことになっていました。

ゆきち論吉のお父とうさんは、そのくらやしきにつとめて、かいまいかた回米方とい
やくう役やくについていました。かいまいかた回米方かいまいかたというのは、このくらやしきおくりこまされてきた米こめの見みはりの番ばんをしたり、しょうにん商人しょうにんにう売つた
りする仕事しごとで、ずいぶん、せきにんのおもい役目やくめでした。けれど
も、そのころのさむらいは、かたな刀かたなをつかうような役やくにつくものはだ
いじにされますが、かねお金のかんじょうなどをする役目やくめのものはみ

さげられていました。この回米方もまた、みさげられる役目だつたのです。

諭吉は、そのお父さんのすえつ子として大阪で生まれました。いちばん上が兄さんの三之助で、その下に三人のねえさんがありました。女の子が三人つづいたあとに、男の子が生まれたのですから、お父さんは大よろこびでした。

「おまえが生まれたときは、やせてはいたけれど、ほねぶとで、じょうぶそうな大きなあかちゃんだったものだから、さんばさんが、『ちちをたくさんませれば、りっぱにそだちますよ。』というのをきいて、お父さまは、たいへんおよろこびになってね、『これはよい子だ。十か十一になったら、お寺へやつて、りっぱ

なおぼうさんにしよう。』とおっしゃったのですよ。そののちも、口ぐせのように、『おぼうさんにしたい。』とおっしゃっていました。

ところが、おまえがかぞえ年^{とし}で三つ^{どし}のときに、お父さまはなくなられました。それで、母^{かあ}さんは、おまえたちをつれて、中津へかえってきたわけだけどね。もし、お父^{とう}さまが生きておられたら、おまえは、いまごろは、どこかのお寺^{てら}の小ぞうさんになっているところだよ。」

と、お母^{かあ}さんがいいました。

「でも、わたしは、おぼうさんはきれいです。お父^{ちち}上^{うえ}は、どうして、わたしを、おぼうさんにしようとなさったのですか。」

「さあ、それは、母さんかあにも、よくわかりませんがね。まあ、りっぱなおぼうさんになるには、勉強べんきようをうんとしなければなりません。お父さまとうは、学問がくもんのすきなかたでしたから、おまえに勉強べんきようをしてもらいたかったのじゃないかとおもいます。どうだろ、おぼうさんになつては……。」

「おぼうさんになるのだけは、かんべんしてください。そのかわりに……。」

「そのかわりに？」

「勉強べんきようをします。」

諭吉ゆきちのしんけんな顔かおつきをみて、お母さんかあは、いかにもうれし

そうに、にっこりとしました。

「さあ、それでは、おチエがまもなく目をさますでしよう。おにぎりでもつくつてやることにしましょう。わたしたちも、お食事をしなくてはならないしね。」

気持ちよさそうにひるねをしているおチエの顔をみながら、お母さんは、台所のほうへはいつていきました。あとにのこつた諭吉は、おぼうさんにならずにすんだので、ほつとしました。

勉強をすることは、このあいだ、兄さんからいわれて、なるほどとおもい、自分でも、やらなければならぬな、とかんがえるようになっていたので、それほど苦にはならなかつたのです。勉強なんてだいきらいだといつていた諭吉が、すすんで勉強するといひだしたことを、お母さんからきいて、兄さんはと

てもよろこびました。

といつても、いまのような学校がっこうはありませんから、勉強べんきょうするといえ、ちかくにある塾じゆく（むかしの学校がっこう）にかようほかありません。そこへかよつて、漢字かんじがいつぱいつまった中国ちゆうごくの本ほんをならうのです。それを漢学かんがくといいました。生徒せいとは、七、八さいの小さな子こから十三、四さいまでのものばかりで、諭吉ゆきちがいちばん年上としうえですから、たいへんきまりがわるいことでした。けれども、負けん気まきのつよい諭吉ゆきちは、

「なあに、いまにみる、みんなにおいついてやるから。」
と、心こころをふるいたたせて、むちゆうで勉強べんきょう強ちゆうにはげみました。そのため、みるみるうちに、おなじ年としごろの子こどもたちにおいつ

き、やがて、その子どもたちをおいこしてしまいました。

塾じゆくは二、三回かい、かわりましたが、その中なかで、いちばんたくさん本ほんをならつたのは、白石常しらいしつねひと先生せんせいでした。漢学かんがくがおもでしたが、論吉ゆきちは歴史れきしがすきで、すきな本ほんは、何回なんかいもよみ、暗記あんきしてしまふほどでした。

十五、六さいごろになると、論吉ゆきちは、ふるいおきてや、わるいならわしにたいして、まえよりもいつそう、ぎもんをもつようになりしました。身み分ぶんのちがいということは、子こどもどうしの中なかにもあつたからでした。第一だいに、ことばづかいがちがうのです。論吉ゆきちたち下したつぱの家いえのものは、身み分ぶんの上うえの家いえの子こにむかつては、「あなたが、ああおっしやつた、こうなさつた。」

と、ていねいにいわなければならぬのにたいして、あいては、「きさまは、ああいった、こうしろ。」

といったちようしです。

じゆく

ゆきち

うえ

塾のせいせきは、諭吉のほうが上ですし、からだもつよくしつかりしていながら、頭あたまがあがりません。それは、親おやの家いえがらや身み分ぶんがちがうためにできたわけへだてでした。それが、諭吉ゆきちにはくやしくてくやしくてたまりません。すると、お父とうさんが、自分じぶんをおぼうさんにしようとした気持きもちちがわかってくるようでした。

ゆきち

とう

がくもん

ひと

みぶん

諭吉のお父とうさんは、学問がくもんのあるりっぱな人ひとでしたが、身み分ぶんがひくいために、つまらない役目やくめにがまんしていなければなりませんでした。ところが、おぼうさんだけは、出しゅつ世せする道みちがあつた

のです。たとえば、さかな屋のむすこや、ひやくしようの子であつても、いっしんふらんに勉強強し、しゅぎようをすれば、えらいおぼうさんになる道がひらけていました。そうなれば、さむらいはもとより、もつと上にいるとのさまや将軍にも、せつきよう（ときおしえること）をすることができますし、とうとばれ、うやまわれもしたのです。

お父さんは、そこに目をつけて、

（子どもに、自分とおなじように、いきのつまりそうにきゆうくつで、ふこうな一生をおくらせたくない。もつて生まれたさいのう 生まれつきの力を、のびるだけのばさせてやりたい。）
きつと、そうかんがえられたのだ、と諭吉はおもいました。

（おお、そうだったのか。それに気がつけば、もつとはやく勉べんき強ようにとりかかるのだったのに。これはぼやぼやしておれないぞ。だが、わたしがおぼうさんになれば、わたし自身じしんはすぐわれるかもしれない。けれども、おなじような人ひとがせけんにはたくさんいるのだ。それらの人々ひとびとのふこうをほうっておくわけにはいかない。

いちばんだいじなことは、このようなふるいおきてや、わるいならわしを、一日いちにちもはやくうちやぶることだ。封建制度ほうけんせいどをなくすことだ。封建制度ほうけんせいどこそ、お父さんとうのかたきだ。にくいにくいかたきだ。）

と、諭吉ゆきちは、はつきりかんがえるようになりました。

中津なかつの町まちからでていきたい

ところが、封建制度ほうけんせいどというものは、ながいあいだにきずきあげられたものですから、ちつとやそつとの力ちからでくずれるものではありません。そのころの日本にっぽんは、どの土地とちも、このふるいおきてでおさめられていましたが、とりわけ、九州きゅうしゅうのいなかである中津なかつは、それがつよいのでした。

ですから、この町まちをとびだして、すこしでも自由じゆうなところにかなければ、一生しょう、このままでおわつてしまふ、と諭吉ゆきちはしみじみとかんがえるようになりました。

兄にいさんの三さん之助のすけは、お父とうさんのあとをついで、下したつぱの役やく人にんになつていました。いとこたちも、仕事しごとについているものは下したつぱの役やく人にんばかりでした。三、四人にんあつまると、身分みぶんのたかい家のいえむすこが、たいした力ちからもないのに、よい役やくについていばるとか、自分じぶんたちは、力ちからがあつても、どうにもならぬのだ、とふへいをもらしあいました。

諭ゆきち吉ちも、そのふへいにはおなじ思おもいでしたが、ぐちのいいあいになつたのでは、いみのないことだとおもいました。そこで、こういうのでした。

「まあ、そんな話はなしはやめようじやありませんか。この中津なかつにいるかぎりは、なんべん、そんなことを、ぐずぐずいっても、役やくにた

ちませんよ。ふへいがあったら、でていくことですね。でていかないのなら、ふへいをいったつてはじまりませんよ。」

「いったな、論吉^{ゆきち}。ばかに大きな口^{くち}をきくではないか。それなら、きみは、中津^{なかつ}をでていくというのか。」

「さあ、それは、なんともいえませんがね。」

あまり、はつきりしたことをいえば、どんなうるさいことがおこるかもしれないから、論吉^{ゆきち}はことばをにりました。しかし、このころから、心^{こころ}の中^{なか}では、中津^{なかつ}からでていくことを決心^{けっしん}して、その決心^{けっしん}を、なんとしてでも実行^{じっこう}しようとおもいさだめました。

そうして、ひそかにじゅんぴをはじめたのでした。ちようど、

白石先生しらいしせんせいのところでは、勉強べんきようしている生徒せいとの中に、
 諭吉ゆきちよりもつとまずしい人ひとが二人ふたりいました。その二人ふたりは、あんな
 まを内職ないしよくにして、勉強べんきようしているのです。

そのことをきいて、諭吉ゆきちは、

（これは、よいことをきいた。自分じぶんも、そのうち中津なかつからとびだ
 さなければならぬが、あんなまを内職ないしよくにすれば、兄にいさんから
 お金かねをだしてもらわなくてもすむ。）

そうおもって、さつそく、その二人ふたりに、あんなまをおしえてもら
 い、しきりにけいこをしました。もともと、手てさきがきようなの
 で、すぐこつをおぼえ、お母かあさんをじっけんのあいてにしました。
 「白石先生しらいしせんせいのところでは、学問がくもんばかりおしえるのかとおも

つていたら、あんまのやりかたもおしえてくださるのかね。ああ、いい気持ちだ。諭吉ゆきちのうでまえは、なかなかたいしたものだよ。」と、お母おおさんは大よろこびです。

もとより、お母かあさんは諭吉ゆきちが中津なかつをとびだそうとしていることをしりません。けれども、諭吉ゆきちは、その日ひのくるのを、じつとまっていたのでした。

そうして、諭吉ゆきちがかんがえていることのあらわれる日ひが、目めにみえないところで、すすんでいきました。時代じだいが大きおおくうごいてきていたのです。

2 ほこりたかき書生しよせい

西洋せいようのまど、長崎ながさき

諭吉ゆきちのまちのぞんでいたときが、やがておとずれました。それは、諭吉ゆきちが二十一さいとなった、安政元あんせいがん（一八五四）年ねん二月がつのことでした。

そのまえの年としの六月がつに、アメリカから、ペリーが軍艦ぐんかん四せきをひきいて浦賀うらが（神奈川県かながわけん）にやってきて、

「国くにをひらいて、ぼうえきをしようではないか。」

と、はげしくせまりました。いやだというなら、大砲たいほうをうちこんでも、うんといわせるといういきおいでした。これは、江戸幕府くふにとつては、たいへんむずかしいもんだいでした。

というのは、江戸幕府えどばくふは、それまで、およそ三百年ねんちかくのあいだ、外国がいこくとのつきあいをせず、品物しなもののとりひきなどもしないことにしていました。ですから、世界せかいの国々くにぐにのようすは、なにもわかりませんし、また、どうなっているかをしろうともしませんでした。これを「鎖国さこく」といいます。つまり、国くにをとじて、外国がいこくをしめだしてしまつたわけでした。ただ、中国ちゆうごくとオランダながさきだけは、長崎ながさきでぼうえきをすることがゆるされていました。

なぜ、幕府ばくふが国くにをとぎしたかといいますが、それは、キリスト教きょうが日本にっぽんにはいつてくるのをおそれたからでした。中ちゆう国こくとはとなりどうしで、まえまえからのつきあいであり、キリスト教きょうの国くにではないから、そのままつきあつたのですが、オランダとは、キリスト教きょうを日本にっぽんへひろめないというやくそくで、ぼうえきをしていました。

ところが、こんど、キリスト教きょうをしんずるアメリカが、日本にっぽんに国くにをひらかせて、自由じゆうにぼうえきをやろうといつてきたのです。こまつた幕府ばくふは、ペリーのさしだしたアメリカ大統だいとう領りやうからの手紙てがみだけをうけとりました。ペリーは、へんじは一年ねんのちにもらうからといって、かえつていきました。

さあ、それからがたいへんでした。国をひらこうという考えのひと、外国人はみなおいはらえという考えのひと、日本は二つにわかれしました。しかも、京都の天皇のがわは、国をひらきたくない考えだったので、幕府は、外国との板ばさみになつたかつこうでした。

でも、ぐずぐずしてはいられません。一年たつたら、ペリーがまたやってきます。もしも、「アメリカのいうとおりにはできない。」というへんじをすれば、軍艦から大砲をうってくるかもしれません。そこで、幕府は、品川のおきに、砲台（大砲をすえたじん地）をつくつて、江戸（いまの東京）の城をまもろうとしました。そのためには、砲術（大砲のつか

いかた)をまなばなければならぬと、やかましくいわれはじめました。

あちこちのとのさまたちのあいだでも、けらいに砲術ほうじゆつをまなばせることがはやってきました。もちろん、中津なかつにも、このことがつたわつてきました。人々ひとびとは、にわかなかつに砲術ほうじゆつというものに心こころをむけはじめました。

その砲術ほうじゆつをまなぶには、オランダからまなぶよりほかありません。それには、どうしてもまずオランダ語ごを勉強べんきようして、オランダ語ごでかいた本ほんがよめるようにならなければなりません。ある日ひ、兄にいさんの三之助さんのすけが、諭吉ゆきちをよんで、いいました。

「どうだ、諭吉ゆきち。オランダ語ごを勉強べんきようして、原書げんしよ(外国語がいこくご)

でかかれた本ほんをよんでみる気きはないか。」

いきなり、こんなことをいわれたので、論吉ゆきちは、目めをまるくしました。それに、原書げんしょということばははじめてきいたことばなので、

「その原書げんしょっていうのは、なんですか。」

とききかえしました。

「オランダ語ごでかいた本ほんのことだよ。日本語にほんごにも、かなりほんや

くされているけれども、だいじなところだけをみじかくかいたり、ときには、まちがってほんやくしたところがあるそうだ。だから、

砲術ほうじゆつをほんとうにしるには、自分じぶんで、その原書げんしょをよまなけ

ればならないんだ。」

「ずいぶんむずかしいんでしようね。」

「それは、むずかしいにきまつているさ。けれども、原書げんしょをよむことができれば、ほんとうのことがわかるからおもしろいぞ。

どうだ、やってみないか、諭吉ゆきち。」

「やりましょう。どうせ、人のよむものなら、横文字よこもじであろうが、

なんであろうが、やれないということはないでしょうから。」

諭吉ゆきちの負けまずぎらいな気持きもちちが、むくむくと、むねの中なかにわきあがって、そういわせました。

「そうだとお。おまえなら、その気きにさえなれば、きっとやれるとおもうよ。」

と、兄にいさんは、にっこりわらいました。

けれども、中津なかつには原書げんしよもなければ、おしえてくれる先生せんせいもありません。オランダのことばを勉強べんきようするには——それを蘭学らんがくといっていました——、長崎ながさきへいかなければなりません。長崎ながさきだけが、そのころの西洋せいようの文明ぶんめいがながれこむ、一つのまどのようなどころだったのです。

さいわいなことに、兄にいさんが、役所やくしよの用事ようじで長崎ながさきへでかけることになったので、論吉ゆきちもいっしょにいくことになりました。

なかつ（中津からとびだしたい。）

という論吉ゆきちのきぼうは、こうしてかなえられたのでした。

数日すうじつののち、長崎ながさきについた論吉ゆきちは、桶屋町おけやちようの光永寺こうえいじという寺てらにいきました。ちようどそのころ、中津なかつの家老かろう（大名だいみょう）

・小名しょうみょうのけらいちようの長この子この奥平おくだいらい壺岐いぎというわかいさむら
 いが、砲術ほうじゆつの研究けんきゆうのためにやつてきて、ここにとまつて
 いたからです。それで、この人ひとにたのんで、お寺てらにやつかいにな
 りましたが、半年はんとしほどのちには、やはり壺岐いぎのせわで、砲術ほうじゆ
 研究けんきゆう家かの山本物次郎やまもとものじろうという人ひとの家いえで、はたらきながら、オ
 ランダの学問がくもんをまなぶことになりました。
 ところが、山本先生やまもとせんせいは目めがわるくて、本ほんをよむことが不ふ自じ
 由ゆうなので、諭吉ゆきちは、世よの中なかのうごきなどについて、いろいろ先せ
 生せいがたの漢文かんぶんでかいたものをよんであげたり、手紙てがみをかわり
 にかいてあげたりしなければなりません。また、山本先生やまもとせんせいに
 はむすこが一人ひとりありましたが、その子こに漢文かんぶんをおしえる家庭かていき

教師ようしの役やくも、仕事しごとの一つでした。

それから、山本やまもと先生せんせいの家いえはくらしむきは大きいのですが、

びんぼうで借しゃっきん金きんがあるものですから、そのいいわけをしたり、

ときにはお金かねをかりにいかなければなりません。下男げなん（男おとこの使しよう

用人にん）が病氣びようきになれば、水みずくみもしました。女じよちゆう中ちゆう（女おんなの

おてつだいさん）にさしつかえがあれば、台所だいどころのてつだいも

しました。ふきそうじはもちろん、先生せんせいがふろにはいられると、

せなかをながしてあげたり、生きいもののすきなおくさんの飼かつて

いるいぬやねこのせわもしなければなりません。

こんなに、うちの中なかのぎつようでもなんでも、諭吉ゆきちは、すこし

もいやな顔かおをしないで、かいがいしくはたらくので、先生せんせいばか

りでなく、おくさんにも、女中じよちゆうにも、家いえじゆうで、たいへんちようほうがられました。

そのころの砲術家ほうじゆつかは、じつさいに大砲たいほうをつくつたり、大砲たいほうのうちかたのけいこをするわけではありませんでした。ただオランダの砲術ほうじゆつの本ほんをいろいろもっているということと、それをよんでせつめいができるというだけでした。

その本ほんをお礼れいをとつてかしたり、それをうつしたいといえ、うつつすためのお礼れいをとるといふわけで、そのお礼れいが山本家やまもとけの取入ゆうにゆうになります。その本ほんをかすのも、うつつすのも、山本先やまもとせんせ生いは目めがわるいので、みな諭吉ゆきちがかわつてやりました。

大砲たいほうをつくるための設計図せつけいずがほしいとか、出島でじまのオランダ

やしきをみたいとかいつてくる人があります。それらのせわをするのも山本先生の仕事でした。設計図など、論吉は、じつさい大砲をうつのはみたこともないのですが、図面をひくだけなら、もともと手さきがきようなものですから、わけはありません。さつさと図をひいたり、せつめいをかいてわたします。

論吉は、全国からあつまってくる人たちをあいてにして、まるでもう、十年もまえから砲術をまなんだ、りっぱな砲術家だとおもわれるほどに、人にあつてこたえられるようになりました。

こうした、いそがしい仕事を、てきぱきとやってのけるあいまには、論吉は自分の勉強強をもわすれませんでした。もともと

ながさき
長崎にでてきたもくてきは、原書げんしよがよめるようになるということでしたから、オランダ流りゆうの医者いしやや、オランダ語ごのつうやくをする人ひとの家いえなどにいつて、いっしんふらんに原書げんしよの勉強べんきようをしました。諭吉ゆきちは、原書げんしよというものはじめてみて、
(これはむずかしいぞ。)

とおもいました。それはむりもありません、アルファベット二十六字じをおぼえてしまうのに、三日みっかもかかったのですから。けれども、五十日にち、百日にちと日ひがたつにつれて、だんだんよめるようになり、いみもわかるようになってきました。

こうなると、おもしろくないのは、奥平おくだいら壱岐いっきでした。壱岐いっきは身分みぶんのたかい家老かろうのむすこで、諭吉ゆきちより十さいぐらい年上としうえです。

はじめはせんぱいぶって、あれこれとおしえてくれていたのですが、そのうちに、砲術ほうじゆつについても、オランダ語ごについても、諭吉ゆきちのほうが上うえになって、壱岐いきはそれまでとはあべこべに、諭吉ゆきちからおそわらなければならなくなりました。それが、壱岐いきにはしやくのたねでした。

それなら、いっしょうけんめいに勉強べんきやうすればよいはずですが、なにしろおぼっちゃんのことですから、自分じぶんでどりよくするということがありません。ただ、諭吉ゆきちが目の上め うえのこぶのようにおもわれてきました。そこで、わるぢえをおもいつきました。

家老かろうのむすこのわるぢえ

諭吉が長崎へきてから、一年あまりたつたときでした。中津の藤本元岱という、医者をしているところから、とつぜん手紙がとどきました。

「お母上さまが、おもい病氣になられました。すぐかえつてこられるように。」

といういみの手紙でした。よんでいく諭吉の顔からは、みるみるうちに血のけがひいていきました。

兄さんの三之助は、なくなつたお父さんとおなじように、大阪のくらしきにつとめており、三人のおねえさんはみなよめ入りして、ふるさとの中津のうちには、年をとつたお母さんのお

順じゆんひとりが一人いるだけなのです。

それにしても、あんなにじょうぶなお母かあさんが、いったいどうなさったのかと、うそのようにおもわれてなりません。けれども、どうじに、一人ひとり心こころぼそくねておられるお母かあさんのすがたをおもうと、論吉ゆきちは、じつとしていられないほどでした。その手紙てがみをくりかえしよんで、論吉ゆきちは男おとこなきになきました。

ところが、ふと、いとこからは、もう一通つうの手紙てがみがきていることに気きがつかしました。それをいそいでよんだ論吉ゆきちの顔かおには、血ちのけがよみがえってきました。

「お母ははうえ上うへさまのご病びよう気きというのは、うそです。じつは、こういうわけがあつて……。」

と、その手紙てがみには、つぎのようなことがかかれていました。

それは、奥平壺岐おくだいらいきのしくんだひきようなはかりごとだったのです。諭吉ゆきちが長崎ながさきへきたとき、壺岐いきはおなじ中津なかつのものだというので、めんどろもみてくれたし、なつかしがりもしました。けれども、自分じぶんよりも身分みぶんのひくい諭吉ゆきちが、勉強べんきようがどんどんすすんでいき、ひょうばんのよくなつていくのをみて、これでは、自分じぶんのねうちがさがつてしまふとおもひこみました。

なんとかして、諭吉ゆきちを長崎ながさきからおいだしてしまおうとかんがえて、そのことを中津なかつの父親ちちおやにしらせてやったのでした。父ちちお親やというのは家老かろうですが、自分じぶんのむすこにたいしてはとてもあまい親おやばかでしたから、諭吉ゆきちのいとこ藤本元岱ふじもとげんたいをよびつけて、

「諭吉が長崎ながさきにいては、せがれ壱岐いぎの出世しゅつせのじやまになるから、中津なかつへよびもどしてくれ。ただし、そのりゆうには、母ははが病び気ようきだといってやれ。」

と、きびしいめいれいです。家老かろうじきじきのめいれいですから、ことわるわけにいきません。

「かしこまりました。」

とこたえて、諭吉ゆきちのお母さんかあにも話はなしをして、そうだんのけつか、おもてむきは、家老かろうのめいれいどおりの手紙てがみをかいて、もう一通つうには、このいきさつをかいて、

「ほんとうは、お母さんかあは元氣げんきですから、けっして心配しんぱいするな

」。

とかいてやったのでした。

これをよんだ諭吉ゆきちのむねは、いかりのために、ばくはつしそうになりました。

（なんとというひきようなわるぢえだ。よしつ、この手紙てがみをみせて、壺岐いぎをとつちめてやろう。）

と、いちじはかつとなりましたが、

（いやいや、まてよ。いま、ここでけんかをしたところで、身分みぶんがちがうから、こつちがまけるにきまつている。それに、壺岐いぎだつて、それほど悪人あくにんではないのだ。）

と、ぐつとがまんをしました。

（けれども、こういうことをきいては、この長崎ながさきにもいたくな

い。お母さんかあがお元氣げんきなんだから、中津なかつへかえることもない。どうすればよいか。）

と、さんざんにかんがえこんだすえ、

（そうだ、江戸えどへいこう。江戸えどにも、りっぱな先生せんせいがおられるはずだ。）

こう決けつ心しんした論吉ゆきちは、なにもしらないふりをして、壱岐いぎのところへ、おわかれのあいさつにいきました。

「じつは、中津なかつのいところから、母ははがきゆうに病氣びょうきになったから、すぐかえってくるようにとしらせてまいりました。ふだんは、いたってじょうぶなほうでしたが、わからないものです。いまごろはどういうようすでしょうか。とおくはなれていますと、氣きにな

つてなりません。」

と、心配しんぱいそうに、いろいろのべたてますと、壱岐いぎも、さもおどろいたような顔かおをして、

「それは、きのどくなことじや。さぞ心配しんぱいであろう。とにかく、一日いちにちもはやくかえったほうがよからう。しかし、母上ははうえの病びよう気がなかつたら、また、長崎ながさきへこられるようにしてやるから。」

と、なぐさめ顔かおにいうのでした。

「それでは、おさしずどおり、さつそく国くにへかえりますが、お父ちち上ちうえさまにおことづてはございませんか。いずれかえりましたら、お目めにかかります。また、なにかおとどける品物しなものがありましたら、もってまいります。」

と、一どわかれをつげて、つぎの朝あさ、またいつてみますと、壱岐いぎは自分じぶんの家いえにやる手紙てがみをだして、これをやしきへとどけてくれ、それからお父ちちうえ上えにあつたら、これこれつたえてくれといい、またべつに、諭吉ゆきちのお母かあさんのいところにあたる大橋おおはし六助ろくすけという人ひとにあてた手紙てがみをとりだして、

「これを大橋おおはしのところへもつていけ。そうすると、きさまがまた長崎ながさきへでてくるのにつごうがよいだろう。」

といって、わざとその手紙てがみにふうをせず、あけてみよといわぬばかりにしてありますから、

「なにもかも、いさいしようちいたしました。」
と、ていねいにわかれをつけました。うちにかえつて、ふうなし

の手紙てがみをあけてみますと、

「諭吉ゆきちは母ははの病氣びょうきにつき、どうしても国くにへかえるというから、しかたなしにかえらせるが、まだ勉べんきよう強ちゆうのとちゆうの身みのうえだから、また長崎ながさきへでてくることができるように、そちが、よくとりはからつてやれ。」

というもんくです。諭吉ゆきちは、これを見て、ますます、しやくにさわりました。

(いまごろは、けいりやくがうまくいったと、とくいになつているにちがいない。このさるまつ 壱岐いさきのあだ名な めつ、ばかやろう。)

と、はらの中でなか、さんざんののしりました。けれども山本やまもと先せんせ

生いにも、ほんとうのことはいえません。もし、この話はなしがわかっ
て、奥おく平だいらというやつはひどいやつだというようなことにでも
なれば、わざわいはかえつて論吉ゆきちの身みにふりかかつて、どんなめ
にあうかしれません。それがこわいので、
「母ははが病びよう氣きになりましたので、中津なかつへかえらなければならなく
なりました。」
といつて、いとまごいをしました。

ただしい勉べん強きようの第だい一いち歩ぽ

ちようどそのとき、中津なかつからくろがね屋や惣兵衛そうべえという商しょう人にん

が長崎ながさきにきていて、用事ようじがすんだので、中津なかつへかえることになつていました。諭吉ゆきちは、その男おとこといつしよにかえろうとやくそくをしておいたのですが、もとより中津なかつへかえるつもりはありません。心こころは江戸えどへむかつていました。といつても、江戸えどにはたよつていくところがありません。

さいわい、江戸えどから長崎ながさきへ勉強べんきやうにきている書生しよせいなかまに、岡部おかべという青年せいねんがいました。しっかりした人物じんぶつですし、そのお父とうさんは、江戸えどで医者いしやをしていました。

「ひとつ、きみにおねがいがあるんだけど。もし、わたしが江戸えどへいったら、きみのお父とうさんの家のげんかん番ばんにしてくれるよう、きみからたのんでもらえまいか。」

とたのみますと、

「いいとも。日本橋にほんばしにいつて、医者いしやの岡部おかべときいてもらえば、

すぐわかるよ。」

と、さつそく手紙てがみをかいてくれました。

こうして、三月がつのなかばごろのある日ひ、諭吉ゆきちたちは長崎ながさきをた

つて、諫早いさはや（長崎県ながさきけん）へむかいました。そこへついたのは、

月つきのあかるいばんでしたが、諭吉ゆきちは、くろがね屋やにむかつていい

ました。

「ところで、くろがね屋や。おれは長崎ながさきをでるときに、中津なかつへか

えるつもりであつたが、きゆうにかえるのがいやになつた。これ

から下しものせき関せきへでて大阪おおさかへむかい、それから江戸えどへいくことに

した。ついては、めんどうでも、このにもつと手紙をとどけてはもらえまいか。」

「それは、とんでもないことです。あなたのような年のわかひ、旅になれないおぼつちやんが、一人で江戸へおいでになるなんて。」

と、くろがね屋は、びつくりしてとめました。けれども、諭吉はかたく決心したことです。くろがね屋とわかれて、一人旅をつづけ、下関から船にのりました。

ところが、この船は、京・大阪などを見物にでかける人々をのせた船でしたから、そのとちゆうでも、あちらこちらのみななどによって、見物をしたり、船の中では、ごちそうをひろ

げて酒さかもりをしてさわいだり、まことに船ふねのすすみぐあいがおそいのです。

論吉ゆきちは、勉べん強きようにでかけようとはりきつているのですから、

ばかばかしくてしかたがありません。十五日にちめに、やっと明石あかし

(兵庫ひょうご県) についたとき、船ふねからおろしてもらいました。これ

から大阪おおさかまであるこうというのです。それでも船ふねよりはやく

大阪おおさかにつくことがわかったので、船ふねからおろしてもらったので

した。

大阪おおさかまでは十五里り(やく六十キロ)あるとききました。お金かね

がないものですから、すきばらをかかえて、とぼとぼとあるきつ

づけました。宿屋やどやにとまることもできません。夜よるになって、さび

しいくらい道みちをとおっているときなど、

(わるいやつがでてこなければよいが。)

と、おもわず、刀かたなのつかをにぎっていることもありました。足をひきずりながら、やつとの思いおもで大阪おおさかの兄にいさんのところにたどりついたのは、夜よるの十時じすぎでした。

兄にいさんは、たいへんおどろきました。が、くわしいわけをきくと、

「そうだったのか、よくわかった。だが、長崎ながさきからここにくる

には、中津なかつによつてくるのが道みちのじゅんというものだ。それを、

おまえはお母かあさんのおられる中津なかつをよけてきた。まあ、わたしが

ここにいなければともかく、おまえとここで顔かおをあわせながら、

このまま江戸えどへいかせたとあつては、まるで兄きょうだい弟だいがぐるにな

ってやったようで、お母かあさんにもうしわけないではないか。お母かあさんは、それほどにはおもわれないかもしれないが、どうしてもわたしの気きがすまない。江戸えどへいかなくとも、大阪おおさかにだって、よい先生せんせいがありそうなものだ。そのことをかんがえてみてくれが、今夜こんやは、おまえはつかれているだろうから、ゆつくりやすんだらよかろう。」

と、やさしくいたわってくれました。

論吉ゆきちは、かぞえ年としで三つどしのときに、中津なかつへかえり、こんど十八じゅうはち年ねんぶりねんで、大阪おおさかへきたのですが、くらやしきのまわりには、まだ論吉ゆきちのことをおぼえているものがたくさんありました。ですから、あくる日ひになると、論吉ゆきちがきたことをしって、これらの人ひ

とびと
 々があつまってきました。

「おお、ほんとに大きくなられた。やつぱり、あかちゃんのおもかげが、どこかにのこっていますね。」

などといって、なみだをながさんばかりに、よろこんでくれる人もいました。諭吉ゆきちのおもりをしてくれた武八ぶはちじいさんは、自分じぶんのまごがきたようなよろこびかたで、堂島どうじまのあたりをあるきながら、

「のう、わかぼつちやま。おまえさまのお生まれうなすつたとき、このわしは夜中よなかに、あの横町よこちようのさんばさんのところへむかえにいったもんです。そのさんばさんは、いまもたつしやにしておるようです。それから、よくおまえさまをだいて、毎日まいにち毎日まいにち、

すもうのけいこ場ばをのぞきにいったものですが、あれがそうです。
」

と、ゆびさしておしえてくれました。それをきいてみると、諭吉ゆきちは、むねがいつぱいになって、おもわずなみだをこぼしました。
こんなわけで、諭吉ゆきちは、自分が旅たびにある身みとはおもえず、ほんとうに、ふるさとにかえつたような気持ちきもちがしました。

そこで、兄にいさんのすすめもあることだし、大阪おおさかで勉強べんきようすることにし、緒方洪庵おがたこうあんという先生せんせいの塾じゆくにはいることになりました。

塾じゆくは「適塾てきじゆく」といい、船場せんばの過書町かいしよまち（いまの東区北ひがしくきたは浜三丁目ま）にありました。緒方先生おがたせんせいはすぐれた町医者まちいしやで、

オランダ語とオランダ医学いがくをおしえていて、おおぜいの書しよ生せいが
いました。

諭吉ゆきちが適塾てきじゆくにはいったのは、安政二あんせい（一八五五）年三月ねんがつ
のことでした。先生せんせいは諭吉ゆきちにむかつて、

「いままで、どんな勉強べんきやうをしてこられたのかね。」
とたずねました。

「はい、きまつた先生せんせいはございませぬ。長崎ながさきで、いろいろな
先生せんせいからならいました。」

「では、これをよんでごらん。」

先生せんせいがさしだした本ほんを、諭吉ゆきちはしばらくみていましたが、や
がてよみはじめました。これまでに勉強べんきやうしたことをおもいだ

しながら、日本語にほんやくしていききました。

「ほほう。本場の長崎で勉強強しただけあつて、きみは、よみかたがうまい。」

とほめてくれたので、諭吉がおもわずにつこりしますと、

「だが、どうも、きみは正式な勉強強をしてないようだね。

土台がしっかりしていない。外国語のいみをただしくくみとる

には、文法、つまりことばのきまり、やくそくだね、それをよ

くしつていなければいけない。文法は文章の土台だ。きみ

は、文法を、あたらしく第一歩からやりなおすひつようがある

ね。」

といわれ、がっかりしてしまいました。

けれども、そのまま、へこたれてしまうような諭吉ゆきちではありませぬ。

「ようし、はじめからやりなおしだ。」

もちまえの負けまじだましいをだして、がんばりましたから、諭吉ゆきちの勉べん強きやうはどんどんすすんでいきました。兄にいさんはいつも、そばではげましてくれたり、いろいろと力ちからになってくれました。

ところが、つぎの年としの正しょう月がつごろから、兄にいさんがリユーマチという病びやう氣きをわずらって、右手みぎての自由じゆうがきかなくなりました。

そのうちに、こんどは諭吉ゆきちが腸ちようチフスにかかりました。それは、適てき塾じゆくの兄あにである岸きしという人ひとが、腸ちようチフスにかかったのを

かんびようしていて、うつつたのでした。たいへんおもくて、こ

れでもう死しんでしまうのではないかとおもわれる日ひが、いく日にちもつづきました。

緒方おがたせんせい先生は、ひじょうに心配しんぱいして、いろいろとめんどうをみてくれました。そのおかげで、四月がつごろには外そとにでてあるくことができるようになりました。兄にいさんも、だいぶんよくなりました。

ちやうど、そのころ、兄にいさんの役所やくしよのつとめがおわり、中津なかつの町まちへかえることになったので、諭吉ゆきちも、なつかしいお母かあさんのそばで、病後びやうごのからだをやしなうことになりました。

兄にいさんといっしょに船ふねにのつてかえったのは、五、六月がつのことでした。

（もう二どと中津へなんか、かえるものか。）

と、かくごをきめていた諭吉ですが、お母さんのつくつてくださるりょうりをいただいていると、目にみえてけんこうをとりもどしてきました。兄さんのリユーマチも、ますますあぶないというようすもないので、八月にふたたび大阪にもどつて、勉強をはじめました。

ところが、秋になつてまもない九月十日ごろ、お母さんから、九月三日に兄さんがなくなつたから、すぐかえつてくるようにとの知らせがありました。びつくりした諭吉は、すぐさま中津へかえりました。そうしきはおわつていましたが、かわいいあとりむすこをなくしたお母さんと、やさしい兄さんをなくした諭吉と

は、手^てをとりあつて、かなしみあいました。

築城書^{ちくじょうしょ}をこつそりうつす

兄^{にい}さんがなくなつたので、諭吉^{ゆきち}は、福沢家^{ふくざわけ}のあととりとなり、
 中津藩^{なかつはん}の役所^{やくしょ}に毎日^{まいにち}、つとめなければならなくなりました。
 けれども、心^{こころ}の中^{なか}では、中津^{なかつ}にいることが、いやでいやでたまり
 ません。

ある日^ひ、おじさんのところでなんの気^きなしに、大阪^{おおさか}へまたい
 きたいとはなしますと、

「ばかなことをいうな。福沢家^{ふくざわけ}のあととりとなつたからには、

この中津で、役所の仕事にはげまなければいけない。よそへいつて、おまけに、せけんできらわれているオランダの学問をしたいなんて、とんでもない話だ。」

と、おそろしいけんまくで、しかられてしまいました。

そのころ、中津藩の空気は大の西洋ぎらいでしたから、諭吉の気持ちなどさつしてくるものがないのも、むりはありません。そこで、諭吉は、お母さんにさんせいしてもらおうほかに方法がないとかがえ、そのゆるしをえるじきをねらっていました。

そうしたある日、諭吉は、長崎からかえつてきた奥平壱岐のところへあいさつにいきました。壱岐は諭吉を長崎からおい

だした人ひとですが、家老かろうのむすこですから、しらぬ顔かおをしているわけにもいきません。ひさびさのあいさつをかわし、よもやまの話はなしに花はなをさかせているうちに、壱岐いきは、一さつの原書げんしょをとりだして、

「どきに、どうじゃ。この本ほんは、長崎ながさきで手てに入いれたオランダの築城書ちくじょうしょ（城しろのつくりかたの本ほん）だ。めずらしいものじゃろうが。なにしろ、わずか二十三両りょうで買かったほりだしものだからな。」
と、じまんそうにみせました。

諭吉ゆきちは、大阪おおさかの適塾てきじゅくで、医学いがくや物理ぶつりの本ほんをみたことはあります。また築城書ちくじょうしょをみたことはありません。それに、ペリーがきてからは、日本にっぽんじゆうで、海うみのまもりや、陸りくの城しろづ

くりの話はなしで大きおおわぎをしているときでしたから、諭吉ゆきちは、いつそこの本ほんをよんでみたくなりました。しかし、かせといたところところで、かしてくるはずはありません。でも、うまくおだてたら、ひよつとしたら、という考かんえがうかんだので、

「いや、これは、まったくすばらしい本ほんです。それを二十三両りょうでお買かいになったなんて、ほんとうにほりだしものです。オランダ語ごの勉べん強きやうがうんとすすまれたから、こういうほりだしものをみつけれられたんですね、きつと。わたしなどには、一年ねんや二年ねんでよみとおせるものではございせん。けれども、せめて、絵図えずともくじだけでも、一ひととおりはいけんしたいものですが、いかがでしょう、四よ、五ご日にち、かしていただけませんか。」

おもいきつて、こう、きいてみました。すると、壱岐は、ほめられたのが、よほどうれしかったとみえて、

「ああ、いいとも。四、五日でよいなら、もつていきなさい。」
 といいました。よろこんだ論吉は、壱岐の気持ちがかわらぬうちに、原書をだいじにかかえて、いそいで家にかえつてきました。

さつそく、羽ペンと墨汁と紙を用意して、二百ページあまりの築城書を、かたっぱしからうつしはじめました。なにしろ、人にしられてはたいへんなので、家のおくにひっこみ、だれにもあわず、昼も夜も、力のかぎり、むちゆうになつてうつしました。

このとき諭吉は、城の門番をするつとめがありました。三日に一どは、その番がまわつてきます。その日だけは、昼はうつすことができません。しかし、夜になると、こつそりとはじめて、朝、城の門があくまでうつしました。顔ははれぼったくなり、病人のようにみえました。

横文字をうつすこともたいへんですが、もしも、このことが壺岐にわかったら、ただ原書をとりかえされるだけではすまないかもしれない。いろいろとむずかしいことになるだろうとおもふと、その心配は一とおりでありません。

(まるで、どろぼうをしているようなものだ。)
と、壺岐にたいして、わるいとおもいましたが、

（でも、壱岐はわるだくみで、自分を長崎からおいだしたんだから、まあ、これで、あいこというものだ。）
と、自分で自分のやっていることをいいわけしてなぐさめ、とうとう、二十日ばかりでうつしおえました。

「せっかくおかしいただいたのですが、もくじをみても、ちんぷんかんぷんで、なにがかいてあるのか、よくわかりませんでした。それで、つい、おそくなつてしまいました。」

論吉が、こういつてかえしますと、壱岐は、かえつて、うれしそうな顔つきをしました。これで、壱岐には、なにもしられずにすみ、論吉はほつとしました。

とどうじに、論吉は、このぬすみうつした築城書をよんで

みたくなりました。それには、大阪へ行って、みっちり勉強しなければなりません。けれども、年とつたお母さんが、どんなにさびしがるだろうとおもうと、諭吉の心はまよいました。でも、おもいきって諭吉がはなしますと、お母さんは、気持ちよくゆるしてくださいました。

大阪へいくとなると、あとのしまつをしておかなければなりません。兄さんの病気で、借金がないありません。家で、家を売らなくて、それをかえしてしまいました。

しかし、諭吉は、これまでとはちがって、福沢家のあととりとなったのですから、藩のゆるしがなければ、中津から一歩も外

へでることができません。蘭学らんがくの勉強べんきょうにいきたいというね

がいをだしました。すると、したしくしているかかりの人ひとが、

「蘭学らんがくしゆぎようというのは、さきにれいがないし、ぐあいが

わるい。砲術ほうじゆつしゆぎようにいきたいというねがいにしたほう

がよい。」

と注意ちゆういしてくれました。

「しかし、緒方おがた洪庵こうあん先生せんせいといえ、大阪おおさかでもゆうめいな医

者しゃですよ。その医者いしやのところへ砲術ほうじゆつしゆぎようにくという

のは、おかしいではありませんか。」

諭吉ゆきちがたずねますと、

「いや、そうしたほうがよい。そうでないと、なかなかゆるしが

でないから。」

というのでした。

かたちやていさいだけにこだわる役所やくしよのやりかたをばかばかしくおもいましたが、とにかく、そういうねがいにかきかえてだしますと、かかりのひと人がいったとおり、ゆるしができました。

ほこりたかきばんカラ書しよせい生

大阪おおさかへふたたびやってきた諭吉ゆきちは、すぐ緒方先生おがたせんせいのところでへいきました。二か月げつぶりにあった先生せんせいに、諭吉ゆきちは、中津なかつであったいろいろなことをほうこくし、かりた原書げんしよをうつしてしま

ったこともはなしました。

「そうか。それは、ちよつとのあいだに、けしからぬことをしたような、また、よいことをしたようなものじゃな。はっはっは。」
とわらいながら、ことばをつづけて、

「ところで、いまの話で、おまえには、どうしても学資がくし（勉べんきよ

強うするためのお金かね）がでないことがわかつたから、わたしがせ

わをしてやりたい。しかし、ほかにも書しよ生せいがいることだし、お

まえ一人ひとりにえこひいきするようにみられては、おたがいによくな

い。どうだろうな、その、おまえがうつしたという築城書ちくじようしよは、

おもしろそうだから、それをおまえにほんやくしてもらおうということにしては……。うん、それがよい。そうしなさい。」

と、しんせつにいつてくれました。

諭吉ゆきちは、よろこんで、その日から、適塾てきじゆくにねとまりして、

勉強べんきようすることになりました。ここには、日本にっぽんじゆうのあち

こちらから、西洋せいよう医学いがくの勉強べんきようをこころぎす青年せいねんや、諭吉ゆきちの

ように、医学いがくではなく、ただ蘭学らんがくをまなびたいという青年せいねんた

ちが、八、九十人にんもあつまつてきておりました。塾じゆくにねとまりし

ているものもおおぜいしました。

この塾じゆくでは、はじめに入にゆう学がくしたものには、上級じようきゆう生せいが、

ガラマチカぶんぼう(文法)をおしえ、やさしい文ぶんのよみかたとやく

しかたをおしえました。これがすむと、セインタキスぶんしようほ(文章

法う)をおしえ、すこしむずかしい文ぶんをならわせます。この二つ

がわかるようになる、あとは、自分で勉強をすすめていくのです。

勉強べんきよう

強のていどによつて、クラスが七つか八つにわかれていて、クラスごとに五人とか十人とかがあつまつて、一人ずつじゅんばんに原書をよんで、日本語にやくします。これを会読かいどくといいますが、わからないところがあつても、だれにもきくことはできません。ただ、ドクトルドクトルズーフというオランダ人のつくつた、大きな「ハルマ」という字引をひいて、自分でかんがえるのおでした。

原書げんしよ

といつても、塾にあるのは、物理学と医学の本だけで、

一つのしゆるいのは一さつずつしかなく、ぜんぶで十さつば

かりでした。そこで、おおぜいの生徒せいとが勉強べんきようするには、くじで、じゅんばんをきめて、めいめいに原書げんしょを半紙はんしに四、五まいぐらいうつしとるわけでした。それに字引じびきは一さつしかありませんから、たいへんでした。

会読かいどくは、毎月まいつききまった日ひに六回かいぐらいおこなわれました。よくできた人ひとには白しろまる、できなかつた人ひとには黒くろまる、わりあてられた文ぶん章しょうがぜんぶできたものには、白しろ三角かくのしるしをつけます。これで三か月げつつづけて白しろ三角かくをもらつた人ひとは、一つ上うえのクラスにすすむことがゆるされました。ですから、ふだんは兄き弟やうだいのようになかのよい生徒せいとたちも、このときばかりは、はげしいきようそうになりました。

論吉は、まえに勉強べんきやうしていたので、こんどは中級ちゆうきゆうのクラスにはいりました。夕食ゆうしょくをすまずと、すぐ一ねむりして、夜の十時よるじごろに目をさまし、それからずっと本ほんをよみます。明けがた、台所だいどころのほうで朝食ちやうしょくのしたくのはじまる音をきくと、もう一どねむり、朝食ちやうしょくができあがるころにおきて、すぐ朝あさぶろにいき、かえって朝食ちやうしょくをすまずと、また本ほんをよむといったありさまでした。

そのため、せいせきはぐんぐんあがって、とうとう、塾じゆくにある本ほんをぜんぶよんでしまい、力ちからもついてきました。こうして、三年ねんたつうちに、論吉ゆきちは、先生せんせいからみとめられて、塾長じゆくちやうになりました。

けれども、諭吉は勉強の虫になつたわけではありません。

おおいに勉強するとともに、かなりないたずらもやつてのけ、おおいにあそんだのです。

新入生は、緒方先生に入門料をおさめますが、そ

のととき塾長の諭吉にも、いくらかのお礼をもつてきます。月

に新入生が四、五人もあれば、ちよつとした金額になりま

す。これでなかまをさそつて牛肉屋へいつて、牛なべをつつき

ながら、酒をのみました。そのころ牛なべをつつくのは、品のわ

るいものがやることで、いれずみをした町のごろつきと、適

塾の書生とにかぎられていました。諭吉は、子どものときか

らの酒ずきだつたものですから、ずいぶんお酒をのみました。

こづかいがなくなると、ズーフの字引じびきをうつしします。あちこちの藩はんから、字引じびきをうつしてくれという注ちゆうもん文がありますので、そのうつし代だいをかせぐわけです。それでも、こづかいにこまつて、しかも、酒さけがのみたいというときには、こんなこともやりました。道修町どしやうちのくすり屋やにくまがとどいて、そのくすり屋やの主人しゆじんが、塾てきじゆくの書生しよせいさんに、かいぼうをしてみせてもらいたいと、たのんできました。それはおもしろいというので、諭吉ゆきちは医者い者しやしぼうではないからいきませんでした。塾じゆくから七、八人にんがそろつてでかけていって、かいぼうにとりかかり、これがしんぞうで、これが肺はい、これがかんぞうだ、とせつめいしてやると、

「まことに、ありがとうございました。」

といつて、くすり屋やの主人しゅじんは、さつさとかえつてしまいました。
 これは、適塾てきじゆくの書生しよせいにかいぼうしてもらえば、くすりにす
 るくまのきもが、うまくとれるとかんがえてしくんだものですか
 ら、くまのきもさえとれば、用事ようじがすんだわけでした。

塾じゆくの書生しよせいたちには、このことがわかつていますから、おさま
 りません。諭吉ゆきちが中ちゆうしん心しんとなつて、くすり屋やにかけあう手紙てがみを
 かき、使者ししやにいくのはだれ、おどかすのはだれ、と、それぞれの
 役やくをきめて、かけあいに行きました。くすり屋やの主人しゅじんも、これ
 にはこまったとみえて、ひらあやまりにあやまり、酒さけを五しよう
 に、にわとりときかななどをお礼れいとしてだしました。

「これはしめた。」

とばかり、その夜よる、諭吉ゆきちたちがおおいにのんだのは、いうまでもありません。

ところが、この酒さけのみのことで、諭吉ゆきちは大だいしっぱいをやりました。夏なつの夜よるのことでした。大阪おおさかの夏なつはあついで、諭吉ゆきちたちは、まるはだかなつでねることにしていました。諭吉ゆきちが二ふたかいの部屋へやにねていますと、下したから女おんなの人の声こえで、

「福沢ふくざわさん、福沢ふくざわさん。」

とよびます。諭吉ゆきちは夕ゆうがた酒さけをのんで、いまねたばかりです。

「うるさいなあ。いまごろ、なんの用ようがあるのか。」

と、むつとして、まるはだかのままとびおきて、はしごだんをおりて、

「なんの用だ。」

と、ふんぞりかえったところ、なんと、緒方先生のおくさんではありませんか。にげようにもにげられず、諭吉は酒のよいがいっぺんにさめてしまいました。おくさんも、きのどくにおもったのか、なにもいわず、おくのほうにひっこんでしまわれました。

諭吉は、そこではんせいをしました。

（酒をのんでいたから、こんなしっぱいをしたのだ。よしつ、酒をやめてしまおう。）

それから、ぷつぷつりと酒をやめました。なかまのものは、びつくりしました。中には、

「なあに、三日ぼうずで、すぐにのみだすにちがいない。」

と、ひやかし半分はんぶんにみているものもありましたが、十日とおかたち、十五日いちにちたつても、酒さけをのみません。

高橋たかはしという親友しんゆうが、

「きみのしんぼうはたいしたものだ。みあげてやるぞ。しかし、人間にんげんというものは、たとえわるいならわしでも、きゆうにやめることはよくない。きみが、いよいよ酒さけをのまぬことに決心けっしんしたのなら、そのかわりにたばこをはじめたらどうか。人間にんげんには、なにか一つぐらいたのしみがなくてはいけないぞ。」

と、しんせつらしくいつてくれました。

論吉ゆきちは、たばこはだいきらいで、これぐらい、なんのたしにもならぬものはないと、さんざんにわる口くちをいつていたので、

高橋たかはしのいうことも一つのりくつだとおもい、たばこをはじめました。はじめのうちは、からくてくさくて、いやでしたが、だんだんになれていき、一か月もたつうちには、たばこのみになつてしまいました。

いっぽう、酒さけのほうもわすれることができませぬ。いけないとはしりながら、ちよいと一ぱいやつてみました。すると、もう一ぱいのみたくなります。けつきよく、酒さけはまたのむようになり、たばこものむようになつてしまいました。

諭吉ゆきちたちのやることは、せけんの人々ひとびとからみると、いたずらとしかみえません。じつは研究けんきゆうねっしんのせいでした。諭吉ゆきちたちは、いつも原書げんしょと首つぴきでじっけんにはげみました。

あるとき、ろしや（塩化アンモニウムのべつの名）をつくつて
みることにになりました。それにはまず、アンモニアをつくらなけ
ればなりません。アンモニアはほねからとりますが、ほねのかわ
りに、うまのつめのけずりくずを、たくさんもらつてきて、とつ
くりの中に入れ、外がわに土をぬりました。

また、すやきの大きなかめを買つてきて、しちりんのかわりに
し、火をどんどんおこして、その中へ、とつくりを三本も四本も
入れて、うちわでバタバタあおぎました。すると、とつくりの口
につけたくだのさきから、たらたらと液がながれてきました。こ
れがアンモニアですが、そのくさいこと、くさいこと、塾のせま
い庭でやっているのですから、たまりません。

緒方先生おがたせんせいのうちのほうでも、気持ちきもちがわるくなって、ごはんもたべられない、ともんくができました。いやなにおいが着物きものにしみこんでしまつて、夕ゆうがた、ふろ屋やにいくと、着物きものばかりか、からだにまでくさいにおいがしみついていて、みんなからはいやがられるし、いぬさえもほえついてきました。

「このごろ、適てきじゆく塾じゆくの書生しよせいさんたちは、酒さけどつくりをちつともかえしてくれないが、どうしてだろう。」

酒屋さかやのおやじさんが、こつそりさぐらせると、なにかひどくさいにおいのするものじっけんにつかっているというのです。酒屋さかやはその後ご、なんとさけ酒さけをもつてこなくなりしました。

これには、みんなこまりました。

このときのじっけんでは、アンモニア水すいをつくれたものの、か
 たまらず、かんぜんなろしやになりませんでしたし、あまりくさ
 いので、いったんうちきることにしました。しかし、せつかくで
 きかかったものをやめてしまうのは、学者がくしやのふめいよだとい
 うので、二、三人にんのものは、淀川よどがわに船ふねをうかべて、じっけんをつ
 づけました。

ところが、風かぜむきによつて、そのくさいにおいが、川かわから町まちの
 ほうへながれていくので、またそこからもんくができました。それ
 で、川上かわかみのほうへのぼつたり、川下かわしものほうへくだつたりしな
 がら、研究けんきゆうをつづけるといふありさまでした。

このように、適塾てきじゆくの書生しよせいたちは、ときにしつぱいしたり、

ときには、せけんの人々ひとびとからしかられるようなこともしました
 が、どれもこれも、青年せいねんらしい、あたらしいことをしりたいと
 いう、はげしい気持ちきものあらわれでした。自分たちだけが、西せいよ
 洋やうのすすんだ学問がくもんにせつしているのだというほこりが、みんなの心こころの中なかにありました。そうして、本ほんをよむだけでなく、じつ
 さいに自分でやってみて、あたらしい知識ちしきを身みにつけ、世よの中なかに
 役やくだつ学問がくもんをすすめようと、勉強べんきやうにうちこんでいるのでし
 た。

こうした適塾てきじゆくの生徒せいとの中なかから、わか
 い革命家かくめいかの橋本左内はしもとさな、
 軍人ぐんじん・政治家せいじかの村田蔵六むらたぞうろく（のちの
 大村益次郎おおむらますじろう）、医いり
 療りやうの制度せいどをあらためた長与専斎ながよせんさい、
 日本赤十字社にほんせきじゆうじしゃをつくつ

た佐野常民など、のちに幕末から明治にかけてかつやくした人
 たちがでました。

むろん、諭吉も、その中の一人でした。勉強をすればする

ほど、諭吉は西洋の学問のすすんでいることがわかり、日

本も、おそかれはやかれ、これをもっとねっしんにとり入れな

ければならない日がくるにちがない、とかんがえるようになって

てきました。

3 西洋の旅みやげ

オランダ語の先生となつたが

適塾てきじゆくでねっしんに勉強べんきやうしている諭吉ゆきちのもとへ、とつぜん、江戸えどの中津藩奥平家なかつはんおくだいらけのやしきから、使つかいのものがやつてきました。それは安政五あんせい（一八五八）年ねんの秋あきの日のことひで、諭吉ゆきちは二十五さいになつていました。こんど蘭学らんがくの塾じゆくをひらくことになつたから、その先生せんせいになつてほしいといふのです。これは藩はんのめいれいですから、諭吉ゆきちはしようちして、いよいよ江戸えどへ

いくことになりました。

諭吉は、べつにけらいなどいりませんが、藩からけらい一人ぶんの旅費ができましたので、塾のなかまに、だれか江戸へいきたいものはないかといえますと、岡本周吉と原田磊蔵という友人が、いつしよにつれていつてくれともうしでましたので、三人で東海道をあるいて、江戸へむかいました。江戸については、十月もおわりごろで、もう、すこしうすらさむいきせつでした。

木挽町汐留

(いまの新橋のふきん)にある奥平やし

きにいきますと、鉄砲洲(築地)にある中やしきの長屋をかし

てくれるということでした。諭吉は岡本と二人でそこにすんで、

塾じゆくをひらくことになりました。

もう一人ひとり、いつしよにきた原田はらだは、下谷したやの大槻おおつきというお医者いしやのところへいきました。

諭吉ゆきちのところへは、そのうちに、オランダ語ごをならいに、生徒せいとがぼつぼつやってきはじめました。中津藩なかつはんの子こどもばかりでなく、ほかからも入にゅうもん門もんするものがあつて、十人にんあまりの生徒せいとに、諭吉ゆきちは、毎日まいにちオランダ語ごをおしえていました。

ところで、この長屋ながやは、そのときから八十八年ねんまえの明和八めいわ（一七七七）年ねんに、前野良沢まえのりようたくや杉田玄白すぎたげんぱくたちが、オランダのかいぼう学がく（生物せいぶつのからだをきりひらいて研けん究きゆうする学がく問もん）の本ほんを、くしんしてやくした場所ばしょなのでした。それは「解かい

たいしんしょ
 体新書」といって、
 にっぽん
 日本にあたらしい医学にたいへん役だ
 ちました。

そのことをきいた諭吉は、ふかいかんげきをおぼえ、

「よしつ、この塾を、江戸でいちばんりっぱな蘭学塾にして
 みせるぞ。」

とはりきりました。

それにつけても、江戸の蘭学者たちの力はどれほどのもので
 であろうか、それをしておきたいとおもいました。

ある日、島村鼎甫という蘭学者をたずねてみました。島

村はやはり緒方先生のところでまなんだことのある医者で、

江戸にきて、オランダの本のほんやくなどをしていたのでした。

ですから、二人はすぐしたしくなりましたが、このとき、島村
は、生理学（生物のからだのはたらきを研究する学問）
の原書をほんやくしているところで、その本をもつてきて、

「こここのところが、どうもわからなくてよわつていたところだ。
きみ、ひとつ、やってみてくれないか。」

といたしました。諭吉がよんでみますと、なるほどやくしくいと
ころでした。

「ほかの人にも、そうだんしてみましたか。」

「ええ、もう、友だち五、六人にはなしてみたんだが、どうして
もわからないというんだ。」

そこで諭吉は、三十分ばかりかんがえているうちに、ちやんと

わかつてきたので、島村しまむらにせつめいしてやりますと、

「なるほど、そうか。やはり、大阪おおさかじこみはたいしたものだ。」
と、諭吉ゆきちの力をほめてくれました。これで、蘭学らんがくは大阪おおさかのほう
がすすんでいたことがわかり、諭吉ゆきちは、心こころの中でほつとあんし
んしました。

それからのちも、諭吉ゆきちは、原書げんしよの中なかから、むずかしい文ぶん
章ちやうをひっぱりだして、

「ここは、むずかしくてわかりませんが、どうやくしたらよいで
しょうか。」

ともちかけて、いろいろな学がく者しやたちちからの力を、それとなくためし
てみましたが、あまりすぐれた人ひとはみあたりませんでした。

ですから、諭吉ゆきちが、やがて江戸えど一番ばんのひようばんをとるようになつたのも、あたりまえのことといわなければなりません。諭吉ゆきちはまことによい気持ちきもちでした。てんぐにさえなつていました。ところが、諭吉ゆきちのそのてんぐの鼻はなをへしおるような、たいへんなことがおこつたのです。

さあ、こんどは英語えいごの勉べん強きやうだ

嘉永かえい六ろく（一八五三）年ねんの六月がつに、アメリカからペリーがやつてきて、開国かいこくをせまつたことは、まえにかいておきましたが一
幕府ばくふは、一年ねんのちに神奈川かながわ（いまの横濱よこはま）で、アメリカとのあ

いだに和親条約わしんじょうやく（おたがいになかよくしようというとりきめ）

をむすびました。ところが、それだけでは、日本にっぽんをほんとうに

開国かいこくさせたということにならないので、アメリカは、ぜび、修し

好通商条約こうつうしょうじょうやく（商売しょうばいのとりきめ）をむすぼうとかんが

えるようになりました。そのため安政三あんせい（一八五六）年ねんに、ハ

リスがアメリカの総領事そうりょうじとして、伊豆いずの下田しもだ（静岡県しずおかけん）へや

つてきて、幕府ばくふとこうしようしました。

けれども、日本にっぽんの中では、外国人がいこくじんをおいはらえといううん

どうがさかんになり、幕府ばくふとしては、これをおさえる力ちからがなく、

なかなかはつきりしたたいどがきまりません。京都きょうとの朝廷ちやうてい

（天皇てんのうがた）も、修好通商条約しゅうこうつうしょうじょうやくをむすぶことにははん

たいでした。いつぼう、ハリスからのさいそくはつよくなりま
 した。そこで、大老たいろうの井伊直弼いいなおすけは、自分じぶんだけの考かんえで、この条じょう
 約やくにはんをおしてしまいました。

その日は、諭吉ゆきちが江戸えどへでてくる四か月げつほどまえの、安政あんせい五
 (一八五八)年六月十九日ねんがつにちのことでした。

つづいて、オランダ・ロシア・イギリス・フランスの四か国こく
 も条約じょうやくをむすび、すでに日米和親条約にちべいわしんじょうやくで開港かいこうされてい
 た下田しもだ・箱館はこだて(函館はこだて)にくわえて、ちかいらい、神奈かな
 川がわ(横浜よこはま)・長崎ながさき・新潟にいがた・兵庫ひょうご(神戸こうべ)のみなどをひら
 くことがきめられました。

よく年ねんには、横浜よこはまに外国がいこく人がやってきて、ぼうえきをする

ことがゆるされました。これまでは、小さな漁村ぎよそんだったのですが、きゆうにいきいきとした町まちになりました。このあたらしくひらけた横浜よこはまを、諭吉ゆきちはぜひみておきたいとおもいました。

そこで諭吉ゆきちは、ま夜中よなかの十二時じごろに江戸えどをでて、夜の東海とうかい道どうをあるいて、夜明よあけごろに横浜よこはまにつきました。さっそく海岸かいのほうへいってみました。けれども、みなととしてひらけたばかりなので、まだ外国人がいこくじんのすがたもすくなくて、きゆうごしらえのそまつな西洋館せいようかんが、ぽつぽつたてられ、店みせがいくつかならんでいるだけでした。

それらの店みせを、諭吉ゆきちはめずらしそうに、きよろきよるとみまわしながら、あるいているうちに、

「はてな。」

と、首をひねりました。どの店のかんばんをながめても、店さきにならんでいるしなものをみても、かいてあることばが、さつぱりよめないではありませんか。外国人どうしがはなしていることばも、諭吉のとくいなオランダ語とはちがつているようで、なにがなにやら、すこしもいみがわかりません。

さんざんあるきまわったすえ、ある一けんの店によつて、オランダ語ではなしかけてみました。すると、店の主人はドイツ人でしたが、さいわい、オランダ語のわかる人でした。

諭吉の発音がわるいので、うまくつうじませんが、紙にかけばわかるというので、諭吉がかいてみせますと、

「おお、あなたは、オランダ語ご、なかなかうまいことあるね。でも、ここでは、まったく役にたたない。英語えいごでなければだめ。みんな、英語えいごしゃべっている。かんばんも、なにもかも英語えいごばかりね。」

と、店みせの主人しゅじんからいわれました。

「そうか、英語えいごでなければだめか。」

と、諭吉ゆきちはかんがえこんでしまいました。

店みせの主人しゅじんがすすめたオランダ語ごと英語えいごとの会話かいわの本ほんなど、二、三さつを買かうと、諭吉ゆきちは、おもい足あしをひきずって、江戸えどへかえつてきました。

ちようど夜中よなかの十二時じちかくでしたから、まるまる二十四時間じかん、

諭吉ゆきちはあるいていたわけで、へとへとにつかれきっていました。

けれども、それは、あるきつかれたからだけではありません。五、六年ねんもかかって、いっしょうけんめい 勉強べんきょうしたオランダ語ごが、なんの役やくにもたたないことを、じっさいにしまって、がっかりさせられたからでした。

「なんと**い**うばかなことをしたものだ。」

と、諭吉ゆきちはなきたいくらいでしたが、

「でも、くよくよしていてもはじまらぬ。よし、こんどは英語えいごの勉強べんきょうをするんだ。」

諭吉ゆきちは、そのつぎの日ひから、英語えいごの勉強べんきょうにとりかかりました。

とはいつても、いつたい、どこで、だれに英語をおそわつたら
 いいのか、さつぱりけんとうがつきません。そのころの江戸には、
 英語をおしえてくれる先生など、一人もいませんでした。でも
 諭吉は、あきらめないで、あちこちたずねているうちに、耳より
 な話をききました。それは、長崎でつうやくをしている森山
 多吉郎という人が、いま江戸にきて、幕府のご用をつとめてい
 るが、英語ができるといううわさをきいたのです。

諭吉はたいへんよろこんで、さつそく、森山をたずねていき
 ました。森山は、諭吉のねっしんなたのみをきいてはくれまし
 たが、幕府の仕事がいそがしくて、おしえてくれる時間がなかな
 かありません。

「それでは、まあ、せつかくなりたいということですから、毎まいいちにあき朝はやくおいでください。役所やくしよへでかけるまえに、おしえてあげましょう。」
 といつてくれました。

そこで、諭吉ゆきちは、朝あきはやくおきて、鉄砲洲てつぽうずから森山先生もりやませんせいのすんでいる小石川こいしかわまで、八キロメートルあまりを、てくてくとあるいてかよいはじめました。ところが、森山先生もりやませんせいの家にいえついてみると、

「きようはおきやくがきているから。」とか、
 「もうすぐ役所やくしよへでかけなければならぬから。」
 といつてことわられ、毎朝まいあさのように、むだ足あしをふみつづけまし

た。それでも、論吉は、こんきよくかよいました。森山先生

はこれを見て、きのどくにおもい、

「どうも朝はだめだから、あすからは、ばんにきてみてください

。」

といいました。

それで論吉は、こんどは夕がたにかよいはじめましたが、森

山先生は、あいかわらずいそがしくて、おしえてくれるひま

がありません。およそ三か月ほどかよいましたが、とうとう、な

にもおしえてもらえませんでした。おまけに、森山先生も、

それほど英語ができるわけでもないことがわかりましたから、論

吉は、森山先生からおそわることをあきらめてしまいました。

それから、小さい字引を手に入れて、自分一人で英語の勉強に力をそそぎました。けれども、おもうようにはすすみません。

（これは、一人ではだめだ。おなじようなやみをもっている友だちをみつけて、いっしょに勉強すれば、きつとすすむにちがいない。）

こうおもった諭吉は、友だちの神田孝平にあつてはなしてみますと、

「じつは、わたしもやってみたのだが、さっぱりわからない。もう、こりごりだ。まあ、きみは、いつでも元気がいいから、おいにやってみることだね。」

と、あいてになつてくれません。

そこで、こんどは、むらたぞうろう村田蔵六（のちのおおむらますじろう大村益次郎）にすす

めてみました。すると、

「なにも、そんなくろうをすることないじゃないか。やめたほうがよい。ひつような本ほんなら、オランダ人じんがほんやくするから、それをよめばよいじゃないか。」

といわれてしまいました。

これではしかたがないので、三番ばんめに原田敬策はらだけいさくのところへいつてはなしてみますと、

「そうか、それはおもしろい。ぜひやろう。二人ふたりならばき気がつよい。どんなことがあつても、やりとげようじゃないか。」

と、さんせいしてくれました。

こうして、なかまをみつけることのできた諭吉は、それからと
いうものは、すこしでも英語をしっている人があれば、すぐにた
ずねていつて、おしえてもらおうといったありさまでした。

だんだん勉強べんきょうをしていくうちに、英語がオランダ語にかな
りにていることがわかってきました。そうして、英語の力がめき
めきとすすんでいきました。

アメリカの旅たび、ヨーロッパの旅たび

「このたび、アメリカへいかれるそうです。わたしをぜひつれ

ていつてください。」

と、論吉ゆきちはつてをもとめて、はじめてあつた幕府ばくふの軍艦ぐんかん奉行ぶぎようきむらせつつかみよしたけ
木村きむら撰津守喜毅せんしんに、しんけんねんにたのみこんでいました。それは、安政六あんせい（一八五九）年ねんの冬ふゆのある日ひのことでした。うん、うんと論吉ゆきちのことばをきいていた木村きむらは、

「よろしい。それほどねんのぞまれるのなら、つれていつてあげよう。」

と、その場ばでしようちしてくれました。

じつは、幕府ばくふは、まえにとりきめたやくそくにしたがって、条約じょうやく書しよをとりかわすために、アメリカへ新見豊前守しんみぶぜんのかみ・村垣むらがきあわじのかみ おぐりぶんこののかみ
淡路守あわじのかみ・小栗豊後守おぐりぶんの三人にんを使節しせつとして、おくることになり

ました。この使節しせつたちは、アメリカからむかえにきた船ふね、ポーハタン号ごうののつて太平洋たいへいようをわたるわけですが、それといっしょに、幕府ぼくふは、日本にっぽんの軍艦ぐんかん咸臨丸かんりんまるをアメリカへいかせることにしました。それにのりこむのは、軍艦ぐんかん奉行ぶぎようの木村撰津守喜きむらせつのかみよし毅けです。

軍艦ぐんかんというからには、たいそう大きおおな船ふねのようにきこえますが、わずか二百五十トンで、みなとの出ではいりだけにじようきをたき、あととはただ、風かぜをたよりにすすんでいかなければならない、ちつぽけな船ふねでした。

乗組員のりくみいんは艦長かんちようの勝麟太郎かつりんたろう（海舟かいしゆう）ら九十六人にん、ほかに日本にっぽんの近海きんかいを測量そくりようにきて、なんぱしたアメリカの海か

軍士官ブルック大尉ら十人がのりしました。

咸臨丸は、万延元（一八六〇）年一月十九日、使節たちをのせた船よりも一足さきに浦賀を船出しました。

冬のことで、北風がつよく、くる日もくる日も、あらしにおそわれました。船は木の葉のようにゆれ、たかい波はかんぱんにおどりがあがり、うっかりしていると、人間もころがされるしまつで、みんな青い顔をしていました。けれども、日本人が自分たちの軍艦で、はじめて太平洋をわたるのだというほこりがあるので、みんな力をあわせて、あらしとたたかいました。こうして、日本暦で二月二十六日に、ぶじにサンフランシスコにつきました。

サンフランシスコの人々ひとびとは、たいへんなかんげいぶりをみせました。ちよんまげに、はおりはかまをつけ、こしに刀かたなをさした日本人にほんじんのかっこうが、ものめずらしかつたせいもありましょうが、ちつぽけな船ふねで太平洋たいへいようのあら波なみとたたかつてきたということに、よりおおく感動かんどうしたのにちがひありません。馬車ばしゃにのせて、りつぱなホテルにあんないし、町まちのおもだった人々ひとびとが、あとからあとからとおしかけて、下したにもおかないもてなしぶりでした。あらしにもまれてこわれた咸臨丸かんりんまるも、ただでなおしてくれました。

諭吉ゆきちは、西洋せいようの本ほんをたくさんよんでいたのです、だいたいのよすはしっていたのですが、じつさいに目めでみるのははじめてで

す。そうして、百聞ひゃくぶんは一見けんにしかず、ということわざのとおりだと、つくづくかんじました。

日本にっぽんではとても高価こうかなじゆうたんが、部屋へやいっぱいにしきつめてあって、アメリカ人じんがその上うへをくつのまま、へいきであるいているのにもおどろきました。どの家いえにもガス灯とうがついていて、夜よるも昼ひるのようにあかるいのを、うらやましくおもいました。また、いろいろのあつまりで、アメリカ人じんが、男おとこと女おんなと手てをくんでダンスをやるのをみて、びっくりしました。

諭吉ゆきちは、電信でんしんや、めつき工場こうじよう、さとうの製造所せいぞうしよなどもみてまわりましたが、みな本ほんでよんでいることばかりなので、そのしくみにはさほどおどろきませんでした。

わからないのは、政治や社会のしくみでした。ある日、諭吉はたずねてみました。

「ワシントンの子孫のかたは、いまどうしていますか。」

「さあ、どうしていますかねえ。ワシントンにはたしか、むすめがいたはずですから、だれかのおくさんになつてるんでしようね。」

このへんじには、おどろいてしまいました。

アメリカの初代大統領のジョージ・ワシントンといえば、

日本では鎌倉幕府をひらいた源頼朝か、江戸幕府をひ

らいた徳川家康とおなじようなものです。徳川家のものが

ずっと将軍をついでいる日本とくらべて、なんというちが

いでしよう。

もちろん、論吉はアメリカが共和国で、大統領が四年ごとの選挙でかわることはしつていました。が、じつさいにアメリカ人からきいて、なんともふしぎな気がしました。

論吉は、いつしよにいった中浜万次郎とはなしあつて、ウエブスターの辞書を一さつずつ買いました。これが日本にウエブスターの辞書がはいったはじめです。

中浜万次郎は、ジョン・マンともいい、土佐（高知県）のりようでした。あらしにあつてひよりゆうしてるところを、アメリカの捕鯨船にすぐわれ、アメリカで勉強して運よく日本にかえり、幕府につかえ、つうやくとしてのりくんでいた

のです。

すこしおくれて、サンフランシスコについた条約じょうやくとりかわしの使節しせつたちが、ワシントンへいくのとはんたいに、諭吉ゆきちたち咸か臨丸りんまるの一行こうは、日本にっぽんへひきかえすことになり、五十日いちじゅうにちあまりをすごしたサンフランシスコをあとにして、とちゆうハワイによつてから、日本にっぽんへもどりました。なつかしい日本にっぽんにかえりついたのは、もう木々きぎのわか芽めが、みどりの葉はにかわる五月がつのはじめのことでした。

諭吉ゆきちがいなかつたわづかのあいだに、日本にっぽんのようすはとてもかわっていました。京都きょうとの朝廷ちやうていと江戸幕府えどばくふとのあらそいはげしくなり、国くにをひらくことにさんせいの人ひとと、外国がいこくじん人をお

いはらえという人たちのあいだには、いまにもたたかいがおこり
 そうな、ふあんな空氣がただよつていました。そうして、この年
 の三月三日には、がつみつか桜田門外で、水戸の浪士（主人をもたな
 いさむらい）が、幕府が開国したことをおこつて、そのせきに
 ん者である大老の井伊直弼をおそうというじけんまでありまし
 た。

しかし、アメリカのりつぱな文明を自分の目でみてきた諭吉
 は、これを日本にとり入れなければならぬとおもいました。
 そこで、諭吉は、鉄砲洲の塾にもどると、もうオランダ語を
 おしえることはやめて、英語ばかりおしえることにしました。し
 かし、英語をおしえるといつても、諭吉は、字引をたよりに、一

とりに 勉強べんきやうしたわけですから、英語えいごを自由じゆうによみこなすことは
 できません。ですから、生徒せいとにおしえながら、自分じぶんもいつしよに
 勉強べんきやうするのでした。

そうしているうちに、木村きむら撰津守せんつもののせわで、諭吉ゆきちは、幕府ばくふの
 外国方がいこくかた（いまの外務省がいむしょうのような役所やくしょ）のほんやくがかりと
 してつとめることになりました。それは、外国がいこくからさしだして
 くる文書ぶんしょを、日本語にほんごになおす役やくでした。おかげで、世界せかいの国くに
 々にのようすがよくわかりますし、英語えいごの勉強べんきやうにも役やくだちま
 した。

この年としがくれて、文ぶん久元きゆうげん（一八六一）年ねんになると、諭吉ゆきちは、
 おなじ中津藩なかつはんの上級士族じょうきゆうしぞく、土岐太郎とぎたろう八はちの次女じじよ錦きんとけつこん

しました。

ところが、その十二月がつに、諭吉ゆきちはヨーロッパへいくことになりました。それは、幕府ばくふがこんどはヨーロッパ各国かつこくへ使節しせつをおく
ることになり、諭吉ゆきちはほんやくがかりとして、くわわることをめ
いぜられたからです。外国がいこく奉行ぶぎようの竹内下野守たけうちしもつけのかみ・松平
石見守らいわみのかみ・京極能登守きやうごくのとのかみの三人にんが使節しせつで、その役目やくめは、まえ
にやくそくしていた江戸えど・大阪おおさか・兵庫ひょうご（神戸こうべ）・新潟にいがたでと
りひきをはじめのを、すこしのばしたいという話はなしあいをする
ためでした。

使節しせつの一行いこうは、イギリスの軍艦ぐんかんオージン号おーじんごうにのりこみ、品しなが
川わから出しゅつぱつ発はつしました。一行いこうは四十人にんたらずでしたが、外国がいこく

では、たべものが不自由ふじゆうだろうというので、白米はくまいを何なん日にちぶ
 んも船ふねにつみこんだり、宿やどがくらくてはこまるとおもい、ろうか
 につける金かなあんどんや、ちようちん・ろうそくまでそろえてもつ
 ていきました。まるで、大だい名みようが東海道とうかいどうをとおつて、宿屋やどやに
 とまるときとおなじような用意よういをしたわけでした。

ところが、パリについてみると、まったくむだなじゆんびをし
 たことに気がきつきました。あんないされたのは、ホテルⅡデⅡ口
 ーブルという、五かいだての、お城しろのように大おおきいホテルでした。
 部屋へやが六百、はたらいでいる人ひとが五百人にんもおり、おきやくも千人にん
 ぐらいはとまれるほどの広ひろさでした。部屋へやには、冬ふゆだというのに、
 あたたかな空くう気がきほかほかところちよくながれ、部屋へやにもろうか

にも、ガス灯とうがいつぱいついていて、夜よるもまるで昼ひるのようにあか
るのです。それに、すばらしいごちそうがでました。

ですから、せつかく用意よういしてきた金かなあんどんや、ちようちんな
どは、はずかしくてだせません。また、たくさんの白米はくまいも、す
つかりじやまものになつてしまいました。そこで、せわがかりの
下した役やくの男おとこに、ただでもらつてもらうというありさまでした。

シガー（たばこ）とシユガー（さとう）をまちがえて、たばこ
をか買かいにやつたら、さとうをか買かつてきたというような、わらい話ばなし
のようなしくじりもありましたが、もつとけつさくもうまれまし
た。

ある夜よ、論吉ゆきちがホテルのろうかをあるいていくと、使節しせつのけら

いが、ろうかでしやちこぼって、ぼんぼりをもって番ばんをしているではありませんか。なにごとかとおもってよくみると、使節しせつの一人ひとりが、大便だいべんをしに便所べんじょにいったおともでした。便所べんじょの二つもあるドアはみなあけはなされ、そのおくでは、いまや一人ひとりの使節しせつが、日本流にほんりゆうに用ようをたしているのが、まる見えみです。ろうかは、外国がいこくの男女だんじょがいききしているのですから、はずかしいと思ったらありません。

びつくりした諭吉ゆきちは、そのおもてにたちふさがって、ものもいわずにドアをしめ、それから、けらいにわけをはなしてやりました。

こうしたしくじりをやりながら、使節しせつの一行こうは、フランス・イ

ギリス・オランダ・ドイツ・ロシアの国々をたずねて、やく一年間、ヨーロッパの旅をつづけました。イギリスでは、議会在あつて、政党というものが、おたがいに政治のやりかたや、意見のうえであらしい、せんきよによつて勝つたほうの政党が国の政治をやるしくみになつているときかさされましたが、諭吉には、よくのみこめませんでした。

しかし、こんどの旅行ではじめて鉄道にのつて、そのべりなことがわかり、すべての点で、西洋がすすんでいることをじつさいにしつたので、諭吉は、政治のやりかたについても、きようみをもちました。

ロシアでは、医者が病人のしゆじゆつをするところをみせ

てくれました。論吉ゆきちは、だいたんな人間にんげんであるくせに、子ども
 のときから、血ちをみるのがだいきらいだったものですから、医者いしや
 がメスを入れて、ぱつと血ちがとびだすのをみると気持ちきもちがわるく
 なり、気きがとよくなつてしまいました。いっしょにいったものが、
 論吉ゆきちを外そとにつれだし水みずをのませると、やつと正気しょうきにかえりまし
 た。

ところが、使節しせつのつとめは、うまくいきませんでした。話はなしあ
 いやかけひきが、へただったせいもありましようが、そのころの
 日本にっぽんの国内こくないでは、外国人がいこくじんをおいはらえといううんどうがさ
 かねで、外国人がいこくじんをただむやみにきつたりききつたりするじけ
 んが、いくつかおこつたからです。

そのため、はじめフランスへいったときには、ひじょうによる
 こんでむかえられたのに、かつこく 各国をまわつて、ふたたびフランス
 へもどつたときには、まるで、にくいかたきにでもあつたように、
 つめたいあつかいをうけなければなりませんでした。

それは、ちようどこのとき、にっぽん 日本で生麦なまむぎじけんがおこつた
 という知しらせが、フランスへつたえられたからでした。

薩摩さつま（いまの鹿児島かごしまけん）のとのさまの行ぎ列りゃくが、江戸えどをたつ
くにて国へかえることになり、とうかいどう 東海道の生麦村なまむぎむら（いまは横よこ浜はま市し）
い内）をとおつていたとき、よこはま 横浜にきていたイギリス人しんがうま

にのつてやつてきて、ばつたりぶつかつたのです。

そのころ、だいま大名行りゃく列りゃくといえ、みち道みちばたの家いえは雨戸あまどをおろ

し、とおりがかったものは道みちをよけて、とおくから土つちの上うへにすわつて、とのさまののつたかごをおがまなければならぬほどでした。そんなことをイギリス人じんはしりませんから、行ぎょう列れつをよこぎろうとしたのです。それを、ぶれいものというので、きりころしてしまいました。

これにたいして、イギリスは幕府ぼくふにこうぎをしましたが、フランスも、このような日本人にほんじんのやりかたをふんがいたからです。

あぶないせとぎわにたつ日本にっぽん

諭吉ゆきちは、このヨーロッパ旅行りょこうで、日本にっぽんは国くにをひらいて、西せ

いよう 洋の文明ぶんめいをとり入れなければならぬといふ考かんがえをつよめました。そこで、役所やくしよからうけとつたお金かねの大だいぶぶんで、原書げんしよをたくさん買かつてかえつてきました。

けれども、日本にっぽんではあべこべに、外国人がいこくじんをおいはらえといふうんどうがさかんになり、諭吉ゆきちのように、外国がいこくの本ほんをよみ、ヨーロッパがえりの人間にんげんだといえ、いつ、なにをされるかわからない、ぶつそうな世よの中なかになつていました。こういううごきは、まえまえからあつたのですから、諭吉ゆきちは、べつにこわいともおもつていなかつたのですが、友ともだちのいく人にんかが、じつさいにあぶないめにたびたびあつているので、
(これは気きをつけなければいけない。)

とかんがえなおしました。

そうしたある日、本をよみふけつてゐる諭吉の部屋に、女中があわててはいつてきました。

「みようなおきやくさまがいらつしやいました。」

「どんな人かね。」

「大きなかたで、目はかた目で、ながい刀をさしています。」

「そりや、ぶつそんな人のようだが、名はおたずねしたか。」

「はい、おききしましたが、お目にかかればわかるからおつしやつて……。」

どうも、うすきみがわるいとおもつたので、諭吉は、しようじのすきまから、そつとげんかんのほうをのぞいてみました。する

と、そこには、緒方先生おがたせんせいのところところでいつしよに勉強べんきやうして、
 たことのある原田水山はらだすいざんという友だちともがたっているではありませ
 んか。ほつとした論吉ゆきちは、げんかんへでていつて、おもわず、大おお
 きな声こえで、

「このばかやろう。なぜ、名なをいわなかつたんだ。こわい思おもいを
 させやがって、ひどいやつだ。」

とどなりつけました。

そのあとで、二人ふたりは大わらいをしましたが、西洋せいやうの学問がくもんを
 していた人々ひとびとは、いつも、こんな思おもいをくりかえしていたので
 す。まことに、あぶない世よの中なかでした。それとどうじに、日本にっぽん
 の国くにも、ひじょうにあぶないせとぎわにたたされていました。

外国人がいこくじんをおいはらえという人々ひとびとは、ちよつとしたことがあ
 ると、すぐ外国人がいこくじんをきりころすようならんぼうをしました。生な
 麦まむぎじけんもその一つで、これは尾おをひきました。イギリスは、
 つよい艦隊かんたいをおくつて、幕府ぼくふにたいしてへんじをもとめ、フラ
 ンスもいっしょになって、おそろしいたいどで、幕府ぼくふをせめたて
 ました。

イギリスからの文書ぶんしょを、諭吉ゆきちはほんやくさせられました。が、
 イギリスがどんなにつよい決心けっしんをもっているかがわかり、どう
 なることかと心配しんぱいになりました。いつ、戦争せんそうになるかもしれ
 ないありさまでした。

けれども、幕府ぼくふが、イギリスのいいぶんをきき入れて、たくさ

んのお金をはらったので、さいわい戦争にはなりませんでしたが、幕府のよわい外交をふんがいた地方の藩では、外国の軍艦にいくさをしかけて、けつきよく、さんざんなめにあわされるようなじけんが、ひきつづいておこりました。

このようなさわがしさの中で、緒方洪庵先生が、急病でなくなりました。それは、文久三（一八六三）年六月十日のことでした。緒方先生は幕府のおかかえ医者となつて、大阪から江戸にきて、下谷にすんでいました。諭吉は、二、三日まえに先生をたずね、元気な先生と、いろいろ話をしてきたばかりでした。そのお通夜には、緒方先生の教えをうけたものが、たくさんあつまつてきました。その中に、村田蔵六（のち

のおおむらますじろう
 の 大村益次郎（もいましてので、諭吉が、

「おい、村田むらたくん、いつ、長州ちようしゆう（いまの山口県やまぐちけん）からかえ

つてきたんだ。下関しもせきでは、たいへんなさわぎをおこしたよう

だな。じつにばかなことをしたもんだよ。あきれかえった話はなしじゃ

ないか。」

とはなしかけますと、村田むらたは、目めにかどをたてて、いいました。

「なんだと。外国がいこくの軍艦ぐんかんをほうげきしたのがわるいというの

か。」

「そうとも。まるできちがいぎたじやないか。」

「き、きちがいとはなんだ。けしからんことをいうな。長州ちようしゆう

では、外国がいこく人をおっぱらうことに、藩はんのほうしんがきまつてい

るんだ。あんな外国がいこくのやつらに、わがままをされてたまるものか。外国人がいこくじんはぜんぶおいはらうにかぎるよ。」

と、えらいけんまくです。これでは、まるで話はなしになりません。

諭吉ゆきちは、村田むらたとはなすことをやめました。そうして、いつしよに西洋せいようの学問がくもんをまなんだ村田むらたでさえ、このように外国人がいこくじんをおいはらえというありさまですから、いよいよ、自分じぶんのことばやおこないに気きをつけて、このあらしの時代じだいを生きいていかなければならないと、かくごをしました。

(国民こくみんのみんなが、世界せかいのようすをよくしり、日本にっぽんが、どんなに文明ぶんめいにおくれているかがわかったならば、きつと、ゆうきをふるいおこして、あたらしく力ちからづよい日本にっぽんをつくろうと、ど

りよくするにちがいない。それには、こくみん国民が、もつともものしりにならなければならぬ。そうだ、こくみん国民をきょういく教育しなければだめだ。よし、わたしは、そのきょういくしや教育者になろう。さいわい、こんどまた、アメリカへいつてくることになった。いろいろと見みききしてこよう。)

ゆきち諭吉は、アメリカにちゅうもん注文したぐんかん軍艦を、ひきとりにいくくふしせつ府の使節の一行こうにくわわつて、二どめのアメリカのたび旅にでかけていきました。ときに、けいおう慶応三(一八六七)年ねんのしょうがつ正月のことでした。

ゆきち諭吉は、そのまえに、だいしょう大かたな小の刀一本ほんずつをのこして、あとうはぜんぶ売りはらつてしまいました。

（これからよの世なかの中かたなは刀ななんていら
ない。）
とかんがえたからです。

4 明治めいじのともしび

ここまで、たまはとんでこない

「先生せんせいつ、たいへんです。上野うえののほうがくで黒くろいけむりがたちのぼっています。火ひの手ても、ちらちらともえあがりました。」
かけこんできた生徒せいとの一人ひとりが、いきをはずませてしらせました。
それまでしずかだった講堂こうどうが、きゆうにざわめいてきました。

ドカーン、ドドドーン。

はげしい大砲たいほうの音おとが、それにわをかけました。

「あつ、また、大砲だ。」

と、耳みみに手てをやる生徒せいともあれば、本ほんをおいて、いきなり、外そとへとびだそうとする生徒せいともありました。

このとき、諭吉ゆきちは、生徒せいとたちを講堂こうどうにあつめて、経済学けいざいがくの講義こうぎをしているところでしたが、

「しよくん、おちつきたまえ。ここまで、たまはとんできはせん。」

と、一ひとこというと、あとはなにごとごともなかつたように、講義こうぎをつづけていました。生徒せいとたちも、それにつりこまれて、いつのまにか、外そとのさわぎも、大砲たいほうの音おとも気きにならず、講義こうぎに耳みみをかたむけていました。そうして、やがて、時間じかんとなりました。

「さあ、やねの上にあがって、上野のけむりでもみたまえ。ペンの力は剣の力よりもつよいということをし、よくかみしめてね。」
 諭吉は、講義をおわって、にっこりわらい、講堂からでてきました。生徒たちは、

「わつ。」とばかり、かけだしました。

自分の部屋へもどった諭吉は、たいへんまんぞくそうでした。生徒たちが外の大きわざの中で、ねっしんに講義をきいてくれたことが、うれしかったのです。それは、慶応四（一八六八）年の五月十五日のことでした。

この日、上野では、江戸へはいつた官軍と彰義隊とのあいだに戦争があり、そこから八キロメートルばかりはなれた慶

応義塾まで、大砲の音がきこえてきました。生徒たちは塾
 のやねの上にあがって、しきりに上野のほうをみているようす
 すが、諭吉は、慶応義塾をこの新銭座にうつしたことが、
 いかによかったかと、ひそかにかんがえるのでした。

諭吉は、そのまえの年の六月にアメリカからかえってきました
 が、そのかえりの船の中で、幕府のわる口をいったというので、
 きんしん（きまつたすまいから、ある期間、外出をきんじら
 れること）をめいじられました。家の中ではなにをしてもよいが、
 役所へでてきてはならないというのです。諭吉にとつては、か
 えつて生徒におしえるのにぐあいがいよいよよくなりました。

幕府は、その十月に、政権（政治をおこなうけんり）を朝

廷ていにかえしました。みなもとのよりとも源頼朝げん らい ちょうが、鎌倉かまくらに幕府ばくふをひらいてからは、日本にっぽんの政治せいじは武士ぶしがおさめていて、天皇てんのうはただのかざりにすぎなかつたのですが、このときから、天皇てんのうを上かみにいたなくあたらしい政府せいふが政治せいじをとることになりました。

けれども、諭吉ゆきちは、あたらしい政府せいふに不安ふあんをもっていました。なぜなら、朝廷ちやうていは、まえから、国くにをひらくことにはんたいしていたからです。もしも、そのあたらしい政府せいふが、外国がいこくをきらい、外国人がいこくじんをおいはらえといひだしたなら、どうなるでしょうか。外国がいこくと戦争せんそうをひきおこすようなことになり、よわくて小さい日本にっぽんは、つよくて大きい外国がいこくに、うちまかされてしまうにちがひありません。

(そうなたら、あの小さい子どもたちがかわいそうだ。)

諭吉は、庭であそんでいるわが子の一太郎と捨次郎のす
たをみながら、かんがえこみました。

(この子どもたちには、戦争といふかなしいめにあわせたくな
い。日本が、一日もはやく、平和なあかるい文明国になつて
くれるとよい。まあ、いまの大人たちはだめだが、わかい人々
は、きつと、自分のこういう気持ちをおとなはだめだが、わかい人々
い。よし、わたしは、わかい人たちのために、あたらしい教育
育の仕事をしよう。それには本をたくさんかいて、西洋のよ
うすをしつてもらわなければならぬ。)

このように決心した諭吉は、まえよりも塾をさかんにしよう

とかんがえました。

ところが、塾じゆくのある鉄砲洲てつぽうずの奥平家おくだいらけのやしきは、外国人がいこくじんのすむところになるといので、幕府ばくふにとりあげられることになりました。そこで、諭吉ゆきちは、芝しばの新銭座しんせんざに有馬ありまというとのさまの土地とちを買かつて、塾じゆくをたてたのでした。

そのころ、幕府ばくふがたの勝海舟かつかいしゆうと、朝廷ちやうていがたの西郷吉さいごうきち之助のすけ（隆盛たかもり）の話はなし合あいによつて、江戸城えどじやうはぶじにあけわたされましたが、それにはんたいの人々ひとびとがかなりあつて、彰しょう義隊ぎたいと名なのり、上野うえのの山やまにたてこもつたりしていました。ですから、いまにも戦争せんそうがはじまりそうで、江戸えどの市中しちゆうはざわついでいました。

こんなときに、ひろい土地とちを買い、大きな家いえをたてようとするのですから、人々ひとびとはおどろいてしまいました。しかし、仕事しごとのないときですから、大工だいくたちはよろこんでやすいちんぎんではたらいてくれ、なかなかりっぱな塾じゆくができあがりしました。それに年ね号ごうをとつて、「慶応義塾けいおうぎじゆく」と名なづけたのでした。

そうして、五月がつ十五日にち、上野うえのでは、官軍かんぐんと彰義隊しょうぎたいのあいだに戦争せんそうがはじまり、彰義隊しょうぎたいは、まけてちりぢりばらばらになり、寛永寺かんえいじもやけてしまいました。しかし、慶応義塾けいおうぎじゆくでは、しずかに講義こうぎがおこなわれたのでした。諭吉ゆきちの教育きょういくの仕事しごとは、こうして戦火せんかをくぐりぬけて、しだいにくりひろげられていくことになりました。

彰義隊しょうぎたいの負けまいくさにおわつたあと、幕府ばくふがわの人ひとたちは、東北地方とうほくちほうにのがれ、二本松にほんまつや会津若松あいづわかまつや、北海道箱館ほっかいどうはこだて（函館はこだて）の五稜郭ごりようかくなどで、官軍かんぐんにてむかい、つぎつぎにやぶれていきました。幕府ばくふの海軍かいぐんのせきにん者しやだつた榎本武揚えのもとたけあきも、この五稜郭ごりようかくでとらえられたのでした。

このように世よの中なかがさわがしかつたので、幕府ばくふの学校がっこうはつぶれてしまつていましたし、あたらしい政府せいふは、まだ学校がっこうをつくることまでには手てがまわりませんでした。慶応義塾けいおうぎじゆくだけが、西洋せいようのあたらしい学間がくもんをおしえていたわけです。そこで、生徒せいの数かずも、二百人にん、三百人にんをかぞえるようになりました。

そのころのある日ひのことでした。九州きゆうしゆうから、慶応義塾けいおうぎじゆく

にはいりたいと、はるばるやってきた青年せいねんがありました。りつぱな身みなりからかんがえて、さむらいの子こであることはまちがいありません。青年せいねんは、ちょうどであった町ちやうにん人にんふうの男おとこに道みちをたずねました。

「これこれ、慶けい応おう義ぎ塾じゆくへは、どういけばよいのか。」

きかれた男おとこは、じつにいていねいにおしえてくれました。おしえられたとおりにいくと、いどがあつて、そのそばで、一人ひとりのおやじがまきわりをしていました。

「これこれ、おやじ、慶けい応おう義ぎ塾じゆくはここか。そうして入り口ぐちはどこか。」

とたずねると、これまた、しんせつにおしえてくれました。

こうして、塾じゆくの中へはいってくると、さきほど、道みちをおしえてくれた町人ちやうにんふうの男おとこが、塾頭じゆくとうの小幡先生おぼたせんせいで、まきわりをしていたおやじが、なんと福沢先生ふくざわせんせいではありませんか。その青年せいねんは、あなでもあればはいりたいほど、ひやあせをかきました。

慶応義塾けいおうぎじゆくは、こんなふうみんしゆてきに、民主的みんしゆてきなふんいきをもつていました。そうして、明治四めいじ（一八七二）年ねんに、慶応義塾けいおうぎじゆくは、新銭座しんせんざから三田みたへうつりました。

あんさつ者しやが、そこにもいた

諭吉は、三田に慶応義塾をうつしたとき、自分のすむ家もたてましたが、大工にたのんで、家のゆかをふつうよりたかくして、おし入れの中からゆか下へもぐつてにげだせるようにしました。それは、そのころ、ふるい考えをもつ人が、西洋のあたらしい学問がくもんをしているゆうめいな人ひとをころすことがはやっていました。慶応義塾けいおうぎじゆくをひらいた諭吉は、しだいにひょうばんのまどになつてきたので、日ひごろから、けいかいをしていたわけでした。

そのまえの年としの明治三めいじ（一八七〇）年ねん、諭吉は、いのちにかかわるような腸チフスちようちゆうにかかりました。まだすっかりなおりきらなからだで、東とうきよう京きやうへお母さんかあをよぶために、中津なかつへでかけま

した。中津は、ふるさとももあるし、しんるいやしっている人も
 おおいので、気をゆるしていました。ところが、この町でも、諭
 吉はねらわれていたのです。

諭吉のまたいとこに、増田宋太郎という青年がありました。
 十三、四さいばかり年が下で、家もちかく、朝ばん、にこにこし
 てやってくるので、諭吉は、

「宋さん、宋さん。」

とよんで、したしくつきあっていました。この宋さんが、じつは、
 諭吉のようすをさぐるためにやってきていたのです。

あるばんのこと、諭吉のところにしりあいのおきやくがあつて、
 お酒をのみながら、二人はさかんにはなしあっていました。その

とき、そつと庭にわにしのびこんで、このようすをうかがっている青せ年ねんがありました。青年せいねんは、おきやくがはやくかえつていつて、論吉ゆきちがねるのをまつていたのですが、話はなしはなかなかおわりそうになく、十二時じがすぎ、一時じがすぎても、おきやくはかえりそうにもありません。

青年せいねんは、とうとうあきらめて、たちさつていきましたが、これこそ、論吉ゆきちのねこみをおそつてころそうとたくらんでいた宋そうた太郎ろうたろうだったので。論吉ゆきちは、それをこのときにはしらなかつたのですが、四、五年ねんたつてからきかされて、びつくりしました。自分の身みのまわりに、いのちをねらうものがいたのです。そればかりではありません。家いえの中なかのかたづけをおわつて、論ゆ

吉きちは、お母かあさんとめいとをつれて、東京とうきょうへかえることになり、船ふねにのるため、中津なかつから四キロメートルほど西にしの鵜うの島しままでいって、宿屋やどやにとまりました。宿屋やどやのわかい主人しゅじんは、これを見ると、使つかいのものをこつそりと中津なかつへはしらせ、

「今夜こんやこそ、福沢ふくざわをころすのにもつてこいの機会きかいだ。」
としらせました。

ところが、この知しらせをうけて、中津なかつでは、だれが諭吉ゆきちをころしにいくかで、あらそいがおこり、ぎろんをしているうちに、夜よがあけてしまいました。これで諭吉ゆきちは、ぶじに船ふねにのり、いのちびろいをしたわけですが、神戸こうべの宿屋やどやについてみると、東とう京きょうの塾じゅく頭とうの小幡おぼたから、手紙てがみがきていました。

「きくところによりますと、ちかごろは大阪や京都もおだやかでなく、先生をつけねらっているものがあるそうですから、神戸についたら、なるべく人にしられないように気をつけて、すぐ東京へかえつてきてください。」

論吉は、お母さんに、京都や大阪などを、ゆつくり見物させて、よろこばせてあげようとおもっていただけに、がっかりしました。でも、お母さんに、ほんとうのことをはなしたら心配するので、きゆうな用事ができたことにして、見物をやめ、いそいで東京にかえりました。

論吉がねらわれたのは、このときだけではありません。それから二年ほどたって、論吉が関西にでかけたとき、宋太郎は大

おさか
 阪にきていて、ひそかに諭吉ゆきちをころそうとするけいかくをたて
 ていました。ところが、宋太郎そうたろうは、ふるさとのお母さんかあがおも
 い病び気やうきになつたので、きゆうに中津なかつへかえらなければなりませ
 んでした。そこで、なかまの朝吹英二あさぶきえいじに、この仕事しごとをたのんで
 かえりました。

朝吹あさぶきは、ちようど諭吉ゆきちがとまつた、諭吉ゆきちのいとこの医者いしやの家いえ
 で書生しよせいをしていました。ですから、諭吉ゆきちは、大坂おおさかにいるあい
 だは、この朝吹あさぶきを自分じぶんのおともにしていたのです。

(これはうまくいくぞ。)

と、朝吹あさぶきは、すきをうかがつて、あんさつしようとしていまし
 た。

たまたま、諭吉は、わかいいころせわになつた緒方先生の家に
 よばれて、朝吹をつれていきました。先生はもうなくなられ
 ていたわけですが、先生のおくさまと、なつかしい思い出話
 をしているうちに、夜もふけて十時ごろになりました。おくさま
 のすすめで、諭吉はかごにのり、そのわきに朝吹がついていま
 した。もう人どおりはなく、さびしい夜ふけの町に、かご屋の足
 音ばかりが音をたてていました。

(いまだ。)

と、朝吹は刀に手をかけて、すつと、かごにしのびよりました。
 そのとたんに、

ドドドド、ドンドン。

と、たいこがなりました。ふいの音に、朝吹はびつくりしてしまい、手をひっこめてしまいました。それは、ちかくのよせ（落語や講談などのかかる小屋）のたいこの音で、かえりの人がぞろぞろでてきたので、朝吹はもうどうすることもできませんでした。諭吉は、なにもしらず、家へかえることができませんでした。

こんなことがあつてから、朝吹は、諭吉の話をいろいろときいて、ときにはぎろんをしましたが、だんだん、この人はほんとうに日本のためをおもっている人だ、とかんがえるようになりました。そうして、自分のかんがえていたこと、やろうとしていたことが、まちがっているようにおもわれたので、諭吉にすつかりはなしてあやまり、慶応義塾にはいりました。

これをきいて、宋太郎は、

「朝吹あさぶきはけしからんやつだ。」

と、はらをたてましたが、その宋太郎そうたろうも、自分じぶんのわることとをさとつて、諭吉ゆきちにあやまり、やがて慶応義塾けいおうぎじゆくにはいつてきました。

「自分じぶんのわることきに気がついて、あらためるといふのは、りっぱなことだ。」

と、諭吉ゆきちは、二人ふたりをほめました。

このように諭吉ゆきちは、一どは自分じぶんをにくんで、ころそうとまでした人間にんげんでも、わるいとさとつてあやまつてくれば、すなおにゆるしてやり、勉強べんきよう強きやうさせたり、身みのうえのこまかいめんどうも

みてやったのでした。そうして宋太郎そうたろうは、のちに西南せいなんの役えきで西郷隆盛さいごうたかもりの部下ぶかとなり、城山しろやまで死しんだのですが、朝吹あさぶきは慶応義塾けいおうぎじゅくをさかんにするうえで、なくてはならぬ人ひとになりました。

人間にんげんのいのちはたいせつだ

諭吉ゆきちは、ただしくないこと、ひきようなこと、いくじなしおとこ、男らしくないことは、だいきらいでした。ですから、そういうことをみたりきいたりすると、かんしやく玉たまをばくはつさせて、じつとしていることができませんでした。仙台せんだいの洋学者大童信ようがくしやおおわらしん

太夫だゆうをたすけだしたり、千葉ちばの長沼村ながぬまむらの人々ひとびとのために、力ちから

をつくしたこともありますが、ここでは、その一つのれいとして、

榎本武揚えのもとたけあきをすくつた話はなしをとりあげておきます。

榎本武揚えのもとたけあきが、北海道ほつかいどうの五稜郭ごりようかくにたてこもつて、あたら

しい政府せいふにてむかい、とらえられたことは、まえにかきましたが、

そののち、武揚たけあきは東京とうきようにおくられ、とりしらべをうけてから、

ろうやに入れられていました。

ところが、武揚たけあきの家いえにはなんのたよりもなく、ゆくえさえは

つきりしらすれていませんでしたから、年としのいったお母さんかあや、

ねえさんやおくさんは、たいへん心配しんぱいしていました。

そこで、武揚たけあきの妹いもうとのおつとである江連えづれという人ひとから、諭吉ゆきちの

ところへ手紙てがみでといあわせてきました。江連えづれは幕府ばくふの外国奉がいこくぶぎよ行うをしていたので、論吉ゆきちとはしりあつたなかでした。江連えづれは当と時うじ、榎本えのもとの家族かぞくといつしよに静岡しずおかにすんでいたのですが、手紙がみには、つぎのようにかいてありました。

「榎本えのもとはどうしているのでしょうか。江戸えどにきているといううわさは風かぜのたよりにきいたのですが、それもたしかめることができません。母ははやきようだいが心配しんぱいしていますので、江戸えどのしんるいにといいあわせましたが、だれも、自分じぶんが政府せいふにらまれるのをおそれてか、ただの一どもへんじをくれません。あなたにきいたら、なにかようすがわかるだろうと、かんがえて、お手紙てがみをさしあげるわけです。ごぞんじのことがあつたら、どうぞおしらせ

ください。」

よみおわつた諭吉は、きのどくだな、とおもいました。ことに、
 とし
 年とつたお母かあさんがかわいそうでなりませんでした。

もともと、諭吉ゆきちは、榎本武揚えのもとたけあきという人間にんげんをしつてはいま

したが、ふかいつきあいをしたことはありません。ですから、武た
 揚けあきがろうやに入れられていとううわさはきいたことがあり

ますが、べつに、それいじようは気きにもとめていなかつたのです。
 しかし、江連えづれの手紙てがみをみて、しんるいのもものたちが、政府せいふにら
 まれるのをおそれて、へんじをよこさないということをしつて、
 そのひきようなたいどにふんがいました。

(なんとというはくじょうな、ひれつなやつらだ。幕府ばくふの人間にんげんは、

みな、これだからいけない。よし、おれが一人ひとりでひきうけてやる。
。

こうおもいたった諭吉ゆきちは、すぐに、あちらこちらに手てをまわしてしらべました。さいわい、武揚たけあきはまだころされず、ろうやにとらわれの身みとなっていました。

「ころされるかどうか、そのところはどうもわかりませんが、とにかく、ただいまのところは、病びょうき気きもせず、元げんき気でいます。」
としらせてやりました。すると、江連えづれから、

「母ははと姉あねが、東とうきよう京きやうへいきたいといいますが、いつでもよいでしょうか。」

と行ってきました。

「わたしは、政府せいふからいらまれてもかまわないから、どうぞ、東と京うきようへでていらつしやい。」

諭吉ゆきちが、こうへんじをかいいたので、二人ふたりはよろこびいさんで、

諭吉ゆきちのところによつてきました。そうして、武揚たけあきのようすをたずねたり、ひつようなものをさし入いれたりしているうちに、武揚たけあのお母かあさんは、一どでいいから、むすこにあいたいといひだしました。

諭吉ゆきちは、なんとかして、あわせてやりたいとおもいましたが、どうしたら、あわせられるのか、それがわかりません。あれやこれやとかがえたすえ、武揚たけあきのお母かあさんにあいがん書しよというものをかいてださせることをおもいつきました。その文ぶん章しようは、

お母さんかあがかいたもののようにして、諭吉ゆきちがかいてやりました。
「せがれの釜次郎かまじろう（武揚たけあきのこと）が、朝廷ちやうていのお心こころにそむ
きまして、つみをおかしたことは、まことにおそれおおいことで
ございませうが、釜次郎かまじろうはひじょうな親思おやおもいもので、父ちちが病びよう
き気きのときはよくかんびようしてくれました。この親思おやおもいもの
が、あんなに大きおおなつみをおかしましたのは、あくまのしわざで
ございませうか、いまさらなげきかなしんでも、もはや、とり
かえしのつくことではございませう。死刑しけいになりましたも、けっ
しておうらみはいたしません。けれども、わたくしのいのちも、
もうながくはございませう。できることなら、せがれの身みがわり
にしていただきたいところですが、せめて、一ど、あわせてはい

ただけないでしようか。」

こんなことを、こまごまとかいて、それをねえさんが清書せいしよをし、お母さんかあが、つえをついて、とぼとぼと役所やくしよまであるいていつてさしだしました。これをよんだ役人やくにんは、たいへん心こころをうごかされて、すぐに面会めんかいをゆるしてくれました。

さあ、そうになると、諭吉ゆきちは、なんとかして武揚たけあきのいのちをたすけてやりたいとおもいました。すると、たいへんつごうのよいことがおこりました。

ある日ひ、政府せいふの役人やくにんが、オランダ語ごのノートをもつてきて、ぜひ、日本語にほんごにほんやくしてほしいとたのみました。諭吉ゆきちは、それをめくつてよんでいくうちに、

「これは、しめたぞ。」

とよろこびました。このノートは、武揚たけあきが、オランダへ学問がくもんをしにいったとき、勉強べんきょうした航海術こうかいじゆつの講義こうぎをうつしたものでした。武揚たけあきは五稜郭ごりようかくにたてこもったときにも、これをだいじにもつていましたが、いよいよこうさんしたとき、

「国家こっかのために役やくだたせてください。」

という手紙てがみをそえて、官軍かんぐんの参謀さんぼう黒田清隆くろだきよたかにおくつたのでした。諭吉ゆきちは、そのノートだとわかりましたので、これをうまくつかつて、武揚たけあきをたすけようとおもいついたのです。

そこで、諭吉ゆきちは、はじめのほうだけすこしほんやくして、

「これは、航海こうかいになくはならぬりっぱなものです。しかし、

ざんねんなことに、これは講義こうぎをきいてかいたものですから、その本人ほんにんでないと、わからないところがあります。本人ほんにんはだれだかしりませんが、これがぜんぶほんやくできたら、わが国くににとつてたいへん役やくにたつものとおもわれます。」

諭吉ゆきちは、その本人ほんにんが武揚たけあきであることを、ちゃんとしつつはいましたが、わざと知らないふりをして、そのノートを政府せいふにかえしました。そうすれば、武揚たけあきのいのちがたすかるかもしれな
いとかんがえたからです。

それとどうじに諭吉ゆきちは、黒田清隆くろだきよたかとはしりあつたなかでしたから、

「どうでしょうか。榎本えのもとという男おとこは、たいへんなさわざをやつ

たのだから、死刑しけいになつても、しかたがないのだけれども、一どのちをとれば、あとからどうすることもできない。人間にんげんのいのちというものは、なによりもたいせつなものですから、いのちだけはたすけてやったほうが、よいのじやないですか。」
ともちかけました。

「わしも、榎本えのもとという男おとこのえらいところはしつてゐる。だが、ろうやに入れられて、生きながらえている気持ちきもちが氣きにくわない。どうして、いさぎよく死しなぬのだろうか。」

「とんでもない。武揚たけあきが死しんでしまえば、それつきりです。しかし、あれほどの人間にんげんを生いかしておけば、日本にっぽんの国くにのために、どれほど役やくにたつかしれません。」

「なるほど、きみのいうことも、一つのりくつだな。」

黒田は、諭吉の話に心をうごかさず、武揚をたすけるために、力ちからになつてくれることをやくそくしてくれました。

こうして、明治五（一八七二）年、武揚は、ゆるされてろうやからでてきました。けれども、そのお母さんは、病びょう気きですでになくなつていました。武揚は、その後、公使こうしや大臣だいじんになつて、日本の国くにに役やくだつ人ひとになりましたが、その武揚たけあきをたすけだしたのは、諭吉ゆきちその人ひとでした。

天てんは人ひとの上うへに人ひとをつくらず

諭吉は、慶応義塾であたらしい教育をし、「文部省
 は竹橋にあり、文部大臣は三田にいる。」と、せげんでいわ
 れたほどですが、それとどうじに、出版に力を入れました。
 本をだして、一人でもおおくの人に、自分の考えをわかってもら
 い、西洋のすすんだ文明をとり入れてもらいたいと、いつし
 ようけんめいにげんこうをかきました。そうして出版社にま
 かせておいたのでは、そのいいなりのお礼しかももらえないことが
 わかりましたので、自分で出版社をつくりました。
 その出版社は慶応義塾のしき地の中にたてて、主任
 には、いつか大阪で諭吉をねらった朝吹英二をあて、職
 工をたくさんやとい入れ、製本所もつくりました。諭吉のか

いた本ほんばかりでなく、すぐれたものはどんどん出しゅつ版ばんしました。
 諭吉ゆきちが本ほんをかくのは、日本人にほんじんの考かんえかたをあたらしくするの
 がもくてきでしたから、できるだけやさしい文ぶん章しょうをかくよう
 にどりよくしました。そうしてできあがった文ぶん章しょうは、ばあや
 によんできかせて、わかるかどうかをたしかめてから、はつぴよ
 うするといふやりかたでした。

諭吉ゆきちのかいた本ほんはたくさんありますが、その中なかでゆうめいなのは、
 「西洋事情せいようじじょう」「世界国尽せかいくにづくし」「学問がくもんのすすめ」など
 です。これらの本ほんは、どれもやさしくていねいに、だれにでもわ
 かるようにかかれていたので、ひっぱりだこで、人々ひとびとによまれ
 ました。

ことに大きなえいきようをあたえたのは、
 「天てんは人ひとの上うへに人ひとをつくらず、人ひとの下したに人ひとをつくらずといえり：
 ……」

ということばではじまる「学問がくもんのすすめ」でした。

この本ほんで、諭吉ゆきちは、人間にんげんはだれもがびようどうでなければならぬことを、はつきりとかきました。地位ちいとか家いえがらとか、お金かねのあるなしで、さべつがつけられてはならないというのです。そうして、かりに、人間にんげんとしてとうといとか、いやしいとかのくべつがあるとするならば、それは学問がくもんをしたか、しないかのちがいであるから、だれでも学問がくもんをするようにどりよくしようではないか、というのでした。

その学問がくもんというのは、ただむずかしい文字もじをおぼえたり、わかりにくいふるくさい文章ぶんしょうをよんだり、和歌わかをよんだり、詩しをつくつたりするようなことでなく、「人間にんげんふつう日用にちようにちかき実学じつがく」だといいました。そうでない学問がくもんは、なぐさみの学問がくもんにすぎないというわけでした。

近代的な考えきんだいてき かんがかたを、そのものずばりにはつきりいつたので、ふるい考えかんがかたの人々ひとびとは、まっかになつておこりました。しかし、それらの人々ひとびとの中なかにも、これをよんでいくうちに、論吉ゆきちのかたよらない考えかんがかたや、ただしい意見いけんに感心かんしんしてくるものでてきました。

あたらしい政府せいふも、いままでの外国がいこくぎらいをやめて、論吉ゆきちの

「西洋事情」をさんこうにして、アメリカやヨーロッパの文
 明んめいをとり入れて、あたらしい政治せいじをおこなうようになりました。
 明治四めいじ（一八七一）年ねんには、いままでの藩はんをやめて、あたらし
 く県けんをおくことになりました。とのさまも、政府せいふの役人やくにんとおな
 じになったわけです。そうして、諭吉ゆきちにたいしては、役人やくにんにな
 って、政府せいふの仕事しごとをやってもらいたいと、しきりにたのんできま
 した。諭吉ゆきちは、病氣びょうきといつて、ことわりつづけました。
 神田孝平かんだたかひら・柳川春三やながわしゅんさんは、諭吉ゆきちとおなじ洋学者やうがくしやでしたが、
 政府せいふからたのまれて、役人やくにんになっていました。その神田孝平かんだたかひら
 が、ある日ひ、諭吉ゆきちをたずねてきて、

「どうだ、福沢ふくざわ、もう一どかんがえなおして役人やくにんになつてく

れないか。そうすれば、ぼくと柳川やながわは、とてもたすかるんだ。

幕府ぼくふとちがつて、すぐれたものはどんどん出世しゅつせもできるし、政せい府ふの身分みぶんのたかい人も、きみにせひきてほしいといっているのだ。

と、ねっしんにすすめました。

「いや、わたしはごめんだね。役人やくにんにはなりたくないし、役やく人にんで出世しゅつせしたいなど、一どもかんがえたことはない。わたしは平民へいみん、ただの国民こくみんでいいのだ。」

と、諭吉ゆきちは、きつぱりとこたえました。

「どうして、きみは役人やくにんをきらうのかね。」

「そうだね。まず第一だいいちに気きにいらぬのは、役人やくにんがからいばり

をするからだ。

第二に、きみのまえではいいにくいことだが、役人ぜんたいが下品なことだ。

第三には、幕府にちゆうぎそうな顔をしていたものが、幕府がつぶれると、すぐさまあたらしい政府のほうへついて、すこしでもよい地位をえようと血まなこになつていふことだ。そうして地位があがると、いばりちらす。そのところが気に入くない。

第四には、国民だ。士族はもちろん、ひやくしようや町人の子どもでも、すこしばかり文字がわかるやつは、みんな役人になりたがつていふ。役人になれぬまでも、政府にちかづいていって、なにか金もうけをしようとする。そうし

て、せつかくあたらしい世よの中なかになつたのに、国民こくみんは役人やくにんに
へいこらしている。しつかりとひとりだちをして、自分じぶんをたつと
ぶという精神せいしんがない。これでは、日本にっぽんはひらけない。

わたしは、役人やくにんにならないで、ほんとうに自由じゆうで、ほんとう
のひとりだちの生活せいかつとは、こういうものだど、せけんの人々ひとびと
に、ひろくみせてやりたいとおもうのだ。」

「いやに、役人やくにんをやつつけるじゃないか。まるで、ぼくに役人やくにん
をやめさせようとしているみたいだ。」

「そんなことはない。きみは、それでいいんだ。きみの考えかんがどお
り役人やくにんになつたんだからね。自分じぶんの考えかんがどおりにものごとをお
こなうのが、ほんとうに男おとこらしい人間にんげんなんだ。わたしは、役人やくにん

人がきらいだから、役人やくにんにはならない。きみが役人やくにんになつたのを、わたしがさんせいするように、きみは、わたしが役人やくにんにならないのをみとめてくれなくつちや、いけない。」

「なるほど、きみのりくつにあつては、まけだ。」

神田かんだは、あきらめて、わらいながらかえつていきました。

こういつた諭吉ゆきちですから、ある人ひとが、諭吉ゆきちのてがらをたたえて、政府せいふがひようしようしなければならぬといひますと、諭吉ゆきちは、

「とんでもない。わたしは、自分じぶんがすきだから、塾じゆくをひらいたり、本ほんをかいたりしてきたわけだ。それをほめるとか、むくいるとかいうのは、おかしい。とうふ屋やがとうふをつくり、車屋くるまやが車くるまをひくのと、おなじことではないか。わたしをひようしようすると

いうのなら、そのまえに、となりのとうふ屋^やからひようしようしてもらいたいものだね。」

と、いかにも平民^{へいみん}らしい答え^{こた}かたをしました。

諭吉^{ゆきち}は、このように役人^{やくにん}にはならず、せけん^{せけん}のいっばん^{いっばん}の人^ひ

とびと

々^ととともに生きながら、教育者^{きよういくしや}として、また本^{ほん}をかいて、

自由^{じゆう}と民主主義^{みんしゆしゆぎ}の光^{ひかり}をたかくかかげて、どうどうとすすんでい

きました。西南^{せいなん}の役^{えき}もおわつた明治^{めいじ}十二^{じふに}（一八七九）年^{ねん}の七月^{がつ}

には、国会論^{こっかいろん}をかきあげて、慶応義塾^{けいおうぎじゆく}の出身者^{しゅっしんしや}がへん

しゆうしている報知新聞^{ほうちしんぶん}に、社説^{しゃせつ}として一週^{しゅうかん}間^{かん}ほど、毎^ま

いにち

日はつびようしました。

福沢諭吉^{ふくざわゆきち}の名^なまえはださないで、文章^{ぶんしょう}も諭吉^{ゆきち}がかいたの

だと、わからないようにくふうしてのせました。これはたいへんなひょうばんになつて、国会こっかいをひらかなければならないというぎろんが、ひじょうにたかまつてきました。

そのため、政府せいふも、明治十四めいじ（一八八一）年ねんに、国会こっかいを明治二十三めいじ（一八九〇）年ねんにいいよいよひらくというやくそくを、しなければならなくなつたほどでした。

諭吉ゆきちは、さらに明治十五めいじ（一八八二）年ねんに、「時事新報じじしんぼう」という新聞しんぶんを発行はっこうし、政治せいじ・教育きょういく・外交がいこう・軍事ぐんじ・婦人ふじんもんだいなどについて、論文ろんぶんをのせました。

おんな
女の子おんなこでどうしてわるいか

「ああ、また、しようじをやぶったな。なかなか元気があつて、見こみがあるぞ。」

「まあ、元気があつてよいなんておつしやつて。女の子ですから、もうすこし、おとなしくしてくれるといいんですが……。」

「いやいや、女の子だって、元気があろうがいいよ。」

論吉は、自分のむすめが、しようじをやぶるのをながめながら、

おくさんと、こんな話をかわしながら、よろこんでいました。ふつうのうちのお父さんだったら、子どもがしようじをやぶったり、いたずらをしたりしたら、たいていは大きな声でしかるものですが、論吉はちがっていました。

明治十六（一八八三）年、諭吉は五十さいになつていましたが、この年の夏、四男の大四郎が生まれたので、諭吉は四男五女、あわせて九人という、おおぜいの子だからにめぐまれました。その子どもたちを、わけへだてなく、かわいがつたのはいうまでもありません。

子どもたちは自由でかつぱつであつたほうがいい、と諭吉はかゝがえていましたから、おくさんともよくはなしあつたうえ、きるものはそまつにしても、えいようだけはじゆうぶんにとらせるように氣をつけました。

ですから、家の中で、子どもがあばれまわつても、いつこうにしかりません。勉強よりも、からだをじようぶにすることの

ほうがだいじだ、と諭吉はかんがえていたからです。そこで、子どもが、八、九さいになるまでは、おもうままにあばれさせて、からだをじょうぶにすることだけを、いちばんのもくひようにしました。七、八さいになると、はじめて勉強べんきようをさせることにしましたが、もちろん、からだのことは、いつも気きをつけました。福沢家ふくざわけでは、

「きようは、おとなしくよく勉強べんきようしたね。」

などといつて、ほめられることはありませんでした。それよりも、小さな子どもちいこが、

「きようは、遠足えんそくがあつて、とてもおかつたけれど、がんばつてあるいて、先生せんせいにほめられました。」

とか、その上の子が、

「きようは、たいそうがあつて、走りきようそうで一ばんになりました。」

とかいうと、

「それはえらかつたね。では、ごほうびをあげよう。」

こういったちようしで、勉強べんきやうよりも、うんどうができたほうが、ほめられるのでした。

それから、家いえの中なかでは、ひみつなことはいつさいないということにしています。なんでも、ざつくばらんにはなしあうことにしていました。ですから、諭吉ゆきちが子どもこのわるいところをとがめると、子どもこのほうも、諭吉ゆきちのわるいところをいうというありさ

まで、ほんとうにあかるい家庭かていでした。

そのころ、しつけのきびしい家いえでは、主人しゅじんが外がいしゆつ出すると

きは、家いえじゆうのものがげんかんにおくつてでて、手てをついてお

じぎをしたり、かえつてきたときには、また、げんかんにでむか

えるといふのがならわしでしたが、諭吉ゆきちは、けつして、そんなこ

とはやらせませんでした。諭吉ゆきちは外がいしゆつ出するといつても、げん

かんからでるとはきまつていません。台だいどころ所からさつきとでて

いくことだつてありました。かえるときも、そのとおりで、その

ときの足あしのむいたほうからでていたり、はいたりしていまし

た。

あるとき、出入りでいりの商しょうにん人がきて、いいました。

「先生、わたしのうちには、また女の子が生まれました。こんどこそ、男の子が生まれてほしいとおもっていましたので、がつかりしました。」

これをきいた諭吉は、

「女の子で、どうしてわるいのかね。じょうぶでさえあれば、いいじゃないか。せけんでは、男の子が生まれると、『たいそうめでたい。』といい、『女の子であつてもじょうぶなら、まあまあめでたい。』などといっているが、わたしは、そんなつもりでいつているのではない。男の子と女の子のちがいがあろうわけがない。そこにかるいおもいはないはずだ。わたしは、九人の子がみんな女の子だつて、すこしもざんねんとはおもわないね。ただ、

男おとこの子が四人にん、女おんなの子が五人にんというふうに、半分はんぶんずつで、いいあんばいだと、おもうだけだ。女おんなの子が生まれうて、がっかりすることなんてないな。」

「先せんせい生せいのお話はなしをおききしてましたら、なるほど、女おんなの子でもわるくないという気きがしてきました。じつは、家内かないが、女おんなの子が生まれうたというんで、わたしいじょうにがつかりしていると、家内かないです。ありがとうございました。さつそく、家いえにかえつて、家内かないに先せんせい生せいのお話はなしをきかせてやって、元氣げんきをつけてやります。」

その商しょう人にんは、いそいそとかえつていきました。

論吉ゆきちは、口くちさきでいうだけではなく、毎まい日にちの生せい活かつでも、ざいさんをわけるときにも、男おとこの子こと女おんなの子こをすこしもくべつせず、

まったくおなじでした。それは、ゆきち諭吉が、じよせい女性をみ見くんだり
はけっしてしなかつたからにちがいありません。そこでゆきち諭吉は、
おくさんをゆきちふうふ諭吉夫婦はひじょうになかよく、むつま
じくくらししました。ゆきち諭吉は一夫一婦をぶぶしゅちようし、もちろん、
じぶん自分でもそれをじつこう実行しました。

このようにゆきち諭吉は、みんしゆしゆぎ民主主義というものをよくりかいし、こ
れを、ひとびとせけんの人々にわかりやすいぶんしょう文章でただけでは
なく、じぶん自分でじつこう実行したのでした。それを、すべてのことにわた
って、つらぬきとおしていました。

ゆきち諭吉は、ゆきちくんしょうだの、しゃくい（きぞくのくらしい）だのと
いうものが、だいきらいでした。くんしょうをぶらさげていても、

どうということはないとおもっていましたが、明治めいじになって、や
つと身分みぶんからかいほうされたのに、またまた、しやくいをつくつ
て、身分みぶんのくべつをつけるというのは、こっけいなことだとおも
つていたからです。

明治めいじ三十一（一八九八）年ねんに、諭吉ゆきちは脳出のうしゅつ血けつでたおれ、い
のちがあぶないとつたえられたとき、政府せいふは、諭吉ゆきちに、しやくい
をさずけようとなりました。その知らしせがあつたとき、家族かぞくをはじ
め、慶応義塾けいおうぎじゆくの人々ひとびとは、諭吉ゆきちの考かんえをよくしつていました
ので、そうだんのうえ、それをことわりしました。

諭吉ゆきちは、さいわい、よくなりましたが、この話はなしをきいて、

「ああ、よくことわってくれた。」

と、心のそこらよるこびました。

こうして、明治三十四（一九〇一）年、諭吉は、六十八さいの正月をむかえました。それは、あたらしい世紀、二十世紀のはじめの年でした。

慶応義塾のわかい学生たちは、ふるい十九世紀をおくり、あたらしい二十世紀をむかえるために、一九〇〇年十二月三十一日、にぎやかな会をひらきました。そのうちに夜はあけて、一月一日、年始のあいさつにきた人々に、諭吉はいいました。

「いよいよ二十世紀だ。十九世紀の日本は、封建制度がつづき、これをなくするため、ずいぶん、ごたごたした世の中だった。けれども、日本はあたらしい世の中をむかえたのだ。ふる

いことはみんなわすれさつて、かくごをあらたにしてがんばろうではないか。」

論吉ゆきちの目めはあかるくかがやき、希望きぼうにみちた顔かおは、とてもわか

わかしくみえました。ですから、

「福沢先生ふくざわせんせいは、元気げんきになられた。」

と、だれもがあんしんをし、よろこんだのでした。

ところが、その一月がつもおわりにちかいころ、論吉ゆきちは、きゆうに

病びょう気きでたおれました。脳のう出し血けつが、ふたたびおこつたのでし

た。そうして二月三日がつみつか、とうとうその一生しょうをおわりました。

おもえば、福沢論吉ふくざわゆきちこそ、民主主義みんしゆしゆぎの光ひかりをかかげた、明治めいじ

の大きおおなともしびでありました。いや、明治めいじだけではなく、大たい

正よう、昭しょう和わとつづき、今こん日にちのわたくしたちにとつても、なお
大おおきなともしびであるといわなければなりません。　（おわり）

青空文庫情報

底本：「福沢諭吉」講談社火の鳥伝記文庫、講談社

1981（昭和56）年11月19日第1刷発行

2009（平成21）年2月9日第51刷発行

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2011年11月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

福沢諭吉

ペンは剣よりも強し

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 高山毅

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>